Japan Communication Association

日本コミュニケーション学会

第 52 回年次大会

AI とコミュケーション

AI and Communication

2023 年6 月3 日（土）～ 6 月4 日（日）

June 3-4 2023

[大会参加者へのご案内]

1. 受付は、立教大学池袋キャンパス７号館１階にあります。それぞれの発表会場に入る前に、必ず受付にお立ち寄りください。
2. 本年次大会へは Peatix（https://peatix.com/event/3584062/view）より、オンラインでお申込みください。大会参加費は、本学会会員は 4,000 円（当日支払いは 4,500 円）、非会員は 5,000 円です。支払われた参加費の払い戻しはありません。大会開始後の申し込みは、受付窓口でのみ行います。できるだけ 5 月 28 日(日)までにお申し込み下さい。年次大会のパネル、研究発表への参加は参加費を支払った方に限定されます。但し、6 月 3 日の基調講演とシンポジウムは一般公開であり、参加申し込みをした場合にはどなたでも無料でご参加頂けます。
3. 今大会では昼食の販売はしません。各自ご持参ください。会場周辺に幾つかコンビニやレストランはあります。土日に学食の営業はありません。
4. 本年次大会は、すべて対面で実施されます。

[発表者の方へ]

1. 機器をお使いになる方は、操作等の確認を予めお願いいたします。プロジェクター、及びスクリーン、Windows PC、HDMIケーブルは発表教室の全てに設置されております。Macの利用者でご自身のMacを持参されたい方は、アダプターもご用意ください。また、操作については午前中の発表の方は、最初のセッションが始まる前、午後の方は昼休みにご確認ください。
2. 研究発表は、質疑応答を含めて30分です。時間厳守でお願いします。
3. やむを得ない事情で発表ができなくなった方は、すみやかに学術局までご連絡ください。なお、当日の緊急連絡は下の囲みの3つのメールアドレスに同時発信でお願いいたします。

[司会の方へ]

1. 発表開始10分前までに会場に入り、発表者と事前の打ち合わせを行ってください。
2. 発表開始と発表終了の時間を厳守してください。発表終了の時刻になったら、次の研究発表に移ってください。
3. 発表が取り消しとなった場合は、次の発表の前倒しをしないで、その時間帯をあけておいてください。事前に研究発表の取り消しを、学術局が把握している場合は、その旨をお伝えします。

事前問合せ先：

大会実行委員長　師岡　淳也　E-mail: jmorooka@rikkyo.ac.jp

発表・論文について：
学術局　　日高　勝之　　E-mail: k-hidaka@wa2.so-net.ne.jp
事前問合せ及び当日問合せ先：
事務局　　宮脇　かおり　E-mail: miyawakk@andrew.ac.jp

[Information for Participants]

1. Please come to the registration desk upon your arrival, located in the first floor, Building Number 7, Rikkyo University Ikebukuro Campus.
2. Please register for the annual convention online, using the Peatix registration page (https://peatix.com/event/3584062/view). The registration fee is 4,000 yen (4,500 yen at the door) for JCA members and 5,000 yen for non-members. For efficient management of the convention, please register on or before Sunday, May 28. Once the annual convention starts, registration and payment are conducted only at the convention registration desk. All the sessions other than Keynote Address and Symposium are open to those who pay the registration fee. Please note that Keynote Address and Symposium on Saturday, June 3are open to the public (pre-registration is required).
3. Please bring your own lunch. There are several convenience stores and eateries around the premise, but it is advisable to get something on your way to the conference site. The school cafeteria will be closed on weekends.
4. The annual convention will be held face to face exclusively.

[To Presenters]

1. All rooms are equipped with projectors, screens, Windows PCs, and HDMI cable. If you are a Mac user, please bring it with a cable connector. You are advised to try out the equipment prior to your presentation, either before the first session starts or during lunch time.
2. The length of presentation is 30 minutes including questions and answers. Please adhere strictly to the punctual start and finish times of the presentation.
3. In case of cancellation of the presentation, please notify the Office of Academic Services in advance, or any accidental cancellation should be notified by an e-mail to all three addresses listed below.

[To Session Chairs]

1. Please be at the designated room 10 minutes prior to the start of the session.
2. Strictly adhere to the start and finish times of each presentation.
3. In case of cancellation, do not proceed immediately to the next presentation but leave the time slot intact. You will be notified when any accidental cancellation should happen beforehand.

General Inquiry:

Junya Morooka (Program Chair) E-mail: jmorooka@rikkyo.ac.jp

Inquiry about presentation/papers before the convention:

Academic Affairs (Conference Planning) Katsuyuki Hidaka

E-mail: k-hidaka@wa2.so-net.ne.jp

Any inquiry during the convention:

Deputy Secretary General Kaori Miyawaki E-mail: miyawakk@andrew.ac.jp

スケジュール

第１日　６月３日(土)

	A 会場 (7号館1階 7102)
セッション 1 10:00 – 11:30	関西支部企画 （コミュニケーション・ビブリオバトル）
支 部 会・昼 食 11:40 – 12:30	北海道 (7102 教室), 東 北 (7102 教室), 関 東 (7102 教室), 中 部 (7203 教室), 関 西 (7204 教室), 中国四国 (7204 教室), 九 州 (7205 教室)
セッション 2 12:45 – 14:15	研究発表 1 （公的言論） 〈青沼、東、小坂〉 司会：宮崎
総会 14:30 – 15:15	**総　会** 司会：松島　綾（JCA 事務局長） 挨拶：守﨑　誠一（JCA 会長）
学術講演 15:30 – 16:30	**基調講演**（一般公開） 基調講演者：山口　高平（神奈川大学情報学部 教授）
シンポジウム 16:40 – 17:50	**シンポジウム**（一般公開） シンポジスト：山口　高平（神奈川大学） 鈴木　志のぶ（北海道大学） 山田　晴道（東京経済大学） 司会：大橋　理枝（放送大学）

第２日　６月４日(日)

	A 会場 (7号館2階 7204)	B 会場 (7号館2階 7205)
セッション 3 10:00 – 11:00	研究発表 2 （コミュニケーション教育） 〈川野、上土井・竹中・中川・井上〉 司会：田島	研究発表 3 （文化実践） 〈宮脇、齋藤〉 司会：菅野
セッション 4 11:10 – 12:10	研究発表 4 （対人） 〈友池、小山・佐藤〉 司会：森泉	研究発表 5 （メディア分析） 〈神戸、杉原〉 司会：松島

Schedule

Day 1　Saturday, June 3

	Venue A (Room 7102, Building 7, 1st floor)
Session 1 10:00-11:30	Panel organized by Kansai Chapter
Chapter Meeting & Lunch 11:40-12:30	Hokkaido (Room 7102), Tohoku (Room 7102), Kanto (Room 7102), Chubu (Room 7203), Kansai (Room 7204), Chugoku-Shikoku (Room 7204), Kyushu (Room 7205)
Session 2 12:45-14:15	Presentation 1 （public discourse） <Aonuma, Azuma, Kosaka>
General Assembly 14:30-15:15	**General Assembly** MC：Aya Matsushima Opening Remark: Seiichi Morisaki (JCA president)
Keynote Address 15:30-16:30	**Keynote Address (open to the public)** Speaker: Dr. Takahira Yamaguchi (Professor, Kanagawa University）
Symposium 16:40-17:50	**Symposium (open to the public)** "AI and Communication" Panelists: Takahira Yamaguchi (Kanagawa University) Shinobu Suzuki (Hokkaido University) Harumichi Yamada (Tokyo Keizai University) MC: Rie Ohashi (The Open University of Japan)

Day 2　Sunday, June 4

	Venue A (7204, Building 7, 2nd floor)	Venue B (7205, Building 7, 2nd floor)
Session 3 10:00-11:00	Presentation 2 （communication education） <Kawano, Jodoi>	Presentation 3 （cultural practice） <Miyawaki, Saito>
Session 4 11:10-12:10	Presentation 4 （interpersonal communication） <Tomoike, Koyama>	Presentation 5 （media analysis） <Kambe, Sugihara>

6 月 3 日（土）　Saturday, June 4　15:30-16:30

学　術　講　演　Keynote Address

講演者：山口　高平（神奈川大学 情報学部 教授）

議論できる AI の可能性と課題：ChatGPT の時代から考える

講演者は、記号推論 AI の基盤技術であるオントロジー（概念定義）と知識グラフ（人・もの・ことの意味関係データ）に基づき、人と議論して、人の考えを支援する AI の研究を進めてきた。一方、2018 年頃より、文章のある単語を隠（マスク）し、マスク単語とマスク単語の前に現れる単語群との関係性から、マスク単語を推測する Transformer による言語理解 AI である GPT (Generative Pre-trained Transformer)の開発が始まり、2022 年 11 月、GPT-3 により開発された ChatGPT は、質問応答、言い換え、文章要約、テキスト分類、プログラムコード生成などの多くの機能を有し、全世界で、1 億人のユーザ数が教師となり、ChatGPT の間違いを正すことから、短期間で驚くべき性能向上を達成した。しかし、ChaGPT は、依然、間違った回答を返す、不得意な問題も残っている。

本講演では、記号推論 AI と ChatGPT の性能を評価し、議論できる AI の可能性と課題について述べる。

【経歴】

山口　高平（やまぐち　たかひら）　YAMAGUCHI, Takahira

大阪大学工学部通信工学科卒業、同大学院工学研究科通信工学専攻博士前期課程・博士後期課程修了。工学博士。大阪大学産業科学研究所助手、静岡大学工学部助教授・情報学部教授、慶應義塾大学理工学部教授を経て、現在、神奈川大学情報学部教授。 2012 年から 2014 年まで人工知能学会会長。著書に「データマイニングの基礎」「人工知能とは」「AI システムと人・社会との関係」「AI プロデューサー～人と AI の連携～」など。知識ベース推論、機械学習、知能ロボットなどの研究に従事。近年、ユーザ向け AI ロボット開発ツール PRINTEPS を開発し、ロボット喫茶店、教師ロボット連携授業を実践するとともに、産業×AI システム構築方法論、オントロジーと知識グラフに基づく説明・議論できる AI システムについて研究している。また、NHK サイエンスゼロ、あさイチなどに出演し、メディア等で一般人に AI を分かりやすく解説している。

今回の基調講演は一般公開され、会員資格や年次大会参加登録の有無を問わず、誰でも無料でご参加いただけます（要事前予約）。

今回の基調講演は、立教大学異文化コミュニケーション学部の後援を受けています。

6 月 3 日（土）　Saturday, June 4　16:40-17:50

＜シンポジウム＞

AI とコミュニケーション

司会：大橋　理枝（放送大学）
シンポジスト：山口　高平（神奈川大学）
鈴木　志のぶ（北海道大学）
山田　晴道（東京経済大学）

学術講演を受けて行われる本シンポジウムでは、後援者の山口先生に加え、2 名の JCA 会員に登壇いただき、本年度の年次大会テーマである「AI とコミュニケーション」を巡る諸問題について、フロアの参加者からの意見も交え、建設的なコミュニケーションを展開したい。

今回のシンポジウムは一般公開され、会員資格や年次大会参加登録の有無を問わず、誰でも無料でご参加いただけます（要事前予約）。
今回のシンポジウムは、立教大学異文化コミュニケーション学部の後援を受けています。

6 月 3 日（土）　Saturday, June 3　11:40-12:30

支部会議　　Chapter Meetings

各支部でミーティングを行います。部屋割りについてはスケジュール表をお確かめ下さい。
Chapter meetings will be held in the assigned rooms, as listed on the schedule of events.

6 月 3 日（土）　Saturday, June 3　14:30-15:15

総　会　General Assembly

司　会：松島　綾　（立命館大学・日本コミュニケーション学会事務局長）

開会の辞：守﨑　誠一　（関西大学・日本コミュニケーション学会会長）

6 月 3 日（土）　Saturday, June 3

時間	会場	プログラム　Session
10:00 ｜ 11:30	A 会場 (7102)	＜セッション　１＞ パネル　Panel Discussion 関西支部企画
11:40 ｜ 12:30	7102 教室 7102 教室 7102 教室 7203 教室 7204 教室 7204 教室 7205 教室	支部会議　Regional Chapter Meetings 北海道支部　Hokkaido 東北支部　Tohoku 関東支部　Kanto 中部支部　Chubu 関西支部　Kansai 中国四国支部　Chugoku & Shikoku 九州支部　Kyushu
12:45 ｜ 14:15	A 会場 (7102)	＜セッション　２＞ 研究発表 1（公的言論）　Presentation 1 1. 近藤栄蔵・議会主義・無産政党 —近代日本のプロレタリア雄弁の予備的考察その 2— 青沼　智（国際基督教大学） 2. 岸田首相の言語感覚 東　照二（ユタ大学） 3. ポピュラー音楽とコミュニケーション—芸術・学問・日常における対話— 小坂　貴志（神田外語大学）
14:30 ｜ 15:15	A 会場 (7102)	総会　General Assembly 司会：松島　綾　（立命館大学） 開会の辞：守﨑　誠一　（関西大学・日本コミュニケーション学会会長）
15:30 ｜ 16:30	A 会場 (7102)	基調講演　Keynote Address 山口　高平（神奈川大学情報学部 教授） 司会：小西　卓三（昭和女子大学・日本コミュニケーション学会学術局長）
16:40 ｜ 17:50	A 会場 (7102)	シンポジウム　Symposium 「AI とコミュニケーション」 シンポジスト：山口　高平（神奈川大学情報学部） 鈴木　志のぶ（北海道大学） 山田　晴道（東京経済大学） 司会：大橋　理枝（放送大学）

6 月 4 日（日）　Sunday, June 4

時間	教室	プログラム Session
10:00 ｜ 11:00	A 会場 (7204)	＜セッション ３＞ 研究発表 2（コミュニケーション教育）　Presentation 2 1. スピーチ・プレゼンテーション演習における聴く力の育成 —フィードバックに焦点をあてて— 川野　優希（立教大学大学院） 2. インクルーシブディベートに向けた基礎的検討 上土井　宏太（九州大学大学院）・竹中　野歩（九州大学）・ 中川　詩奈（九州大学）・井上　奈良彦（九州大学）
	B 会場 (7205)	研究発表 3（文化実践）　Presentation 3 1. モノのコミュニケーションを考える—ぬいぐるみ病院を事例として— 宮脇　かおり（桃山学院大学） 2. ポスト・コンテンツツーリズムにおける場所・モノの資源化 —コンテンツの錯綜がひきおこす観光のコンフリクト— 齋藤　光之介（法政大学大学院政策創造研究科修士課程）
11:10 ｜ 12:10	A 会場 (7204)	＜セッション ４＞ 研究発表 4（対人コミュニケーション）　Presentation 4 1. 恋活・婚活（自律的出会い）におけるツール選択に関する研究 友池　梨紗（愛知淑徳大学） 2. 個人の認知・心理的特性の歪みが他者のコミュニケーションへの評価に与える影響とその関連性の解明 —完璧に見える人物が癇に障るのはなぜか— 小山　哲春（京都ノートルダム女子大学）、佐藤　桃華（京都ノートルダム女子大学）
	B 会場 (7205)	研究発表 5（メディア分析）　Presentation 5 1. Beyond the Family and Normativity—A Queer Reading of Spy x Family— Naoki Kambe (Rikkyo University) 2. ファンタジーテーマ分析によるナイキ CM のリプライにおける「日本人性」 杉原　奈南実（立教大学大学院）

発表要旨

6 月 4 日（土）　Saturday, June 4　10:00-11:30　Session 1

A 会場 **Venue A**	**パネル** **Panel Discussion**

コミュニケーション、私にとってのこの一冊

―コミュニケーション学に関連して、自身に影響を与えた／授業に使える／学生に勧めたい一冊の（ビブリオ・バトル風）紹介―

司会・登壇：

小山 哲春（京都ノートルダム女子大学）

登壇：

守崎 誠一（関西大学）

日高 勝之（立命館大学）

森口 稔（京都外国語大学）

野島 晃子（平安女学院大学）

コミュニケーション研究において、通事的・共時的に常に変化する一次データを観察・分析し、新しい知見を産み出すことの重要性は論を俟ちません。同時に、ひとりのコミュニケーション研究者／教育者／学習者としての私たちは、他の多くのコミュニケーション研究者の肩の上に立っているわけで、研究者が寄って立っているそれぞれの巨人の異なる姿・形こそがその独創的な研究を可能にしてくれているとも言えます。

本企画では、普段それほど聞く機会のない、他のコミュニケーション研究者の「コミュニケーション学に関連して、自身に影響を与えた本、授業に使える本、学生に勧めたい特別な一冊」のビブリオ・バトル風（すなわち、語り手の個人的な思いを込めた）紹介を行います。通常の書評からは得られない新しい刺激を得ることで、コミュニケーション教育者／研究者／学習者として視点を広げる（巨人を成長させる）と同時に、自身のコミュニケーションに関する知的関心の所在を再確認する機会としたいと思います。

6 月 3 日（土）　Saturday, June 4　12:45-14:15　Session 2

A 会場 **Venue A**	**研究発表 1** **Presentation 1**	**公的言論** **Public discourse**

近藤栄蔵・議会主義・無産政党
―近代日本のプロレタリア雄弁の予備的考察その 2―

青沼　智（国際基督教大学）

本研究では、明治初期、西洋より日本に輸入され自由民権運動の波に乗り「弁論ブーム」を巻き起こしたレトリックの、大正から昭和にかけての政治運動（大正デモクラシー、普選運動）の中での展開を考察する。具体的には、やはり明治初期、日本に持ち込まれたマルクス・エンゲルスの思想に触発された社会主義・共産主義・無産者政治の活動の一環としての雄弁（弁論、演説）実践およびそれに関する教育・啓蒙活動について論述する。

昨年の年次大会では近藤栄蔵（1883―1965）により著された『プロレタリア雄弁学』（1930（昭和 5）年、平凡社）に焦点を当て、マルクス・レーニン主義の政治言説戦略たる宣伝扇動（「アジ・プロ」）と近藤が描いたプロレタリア雄弁との関係を歴史的・理論的に考察した。今回は、自身創立メンバーであった日本共産党と袂を分ち無産政党に参加した近藤の議会主義と彼のレトリック論との関係が如何様であったか、また、共産党離脱以降に近藤が参加した無産政党が 1920 年代から 30 年代にかけ主催した「政治学校」において、雄弁（弁論、演説）がいかに教授されていたのかを考察したい。特に政治学校での雄弁・弁論教育については、近藤に加え浅沼稲次郎が教鞭をとっていたことは注目に値する。浅沼は早稲田大学雄弁会出身であり、第二次世界大戦後は日本社会党の委員長に就いた人物である。浅沼のいわば「和製」プロレタリア雄弁と、米国中等・高等教育の雄弁・討論教育からの影響が認められる近藤のプロレタリア雄弁との比較も本研究で行う予定である。

岸田首相の言語感覚

東　照二（アメリカ合衆国 ユタ大学）

政治家の岸田文雄は、２０２１年の１０月より総理大臣を務めており、日本を代表する首相である。日本で首相として最長記録を達成した元首相の安倍晋三が、突然の凶弾に倒れ、そのまま亡くなるという大事件が勃発した。その際、多くの政治家、国民、マスコミが、民主主義への辛辣な挑戦として、強く避難した。特に、防衛増税問題など、とりわけ、政治家たちと旧統一教会との関係、安倍晋三の国葬問題は、多くの国民、マスコミから注目される事態となり、現在、岸田内閣、およびその関係者をめぐって、強い不支持の状態が続行している。幸か不幸か、その不支持率は３０％前後にまで落ち込んだままとなっている。そこで、本研究では、なぜここまで岸田に関する支持率が落ち込んでいるのか、その背景、特に岸田の政治言語力を中心にして考えてみることにする。政治家の言語使用を観察、評価、考察したものには、さまざまな研究が考えられるが、政治学者の御厨貴は、特に安倍首相以来、政治についての細かい「説明」は、国民に対してしなくて良いのだという風潮が広まってきていると指摘している。特に、２０２２年７月の参議院議員選挙が終わり、今後衆議院の任期満了まで解散がなければ、２０２５年までの３年間、全国規模の国政選挙がないことになる。果たして、どこが岸田にとって、大きな問題なのだろうか。岸田は、実は、自分には人の意見を「聞く」能力、意志があり、この「聞く」力こそが、自分を首相にまで持ち上げたのだと自負してきた。しかしながら、国会での答弁、演説などを調べてみると、「聞く」力どころか、「話す」力もないことが分かってくる。つまり、「聞く」「話す」といった両方の言語の本質について、今一度、考え直し、行動する必要があることが見えてくる。

ポピュラー音楽とコミュニケーション
―芸術・学問・日常における対話―

小坂　貴志（神田外語大学）

ラップシーンが映し出す日本社会を対話論的に素描し、対話論と音楽との深い関係を指摘されている（出口・小坂、2022）。本研究では、ポピュラー音楽全般と対話論との共通項を探り、その関係性を俯瞰する予備的文献調査を実施していく。

これまでに行ってきた先行研究のまとめから得られた知見によると、音楽と対話論とは深い関係にある。対話論を構成する要素の一つである「声」（voice）は、リリックを伴う楽曲には欠かせ

ない。文芸批評家バフチンは、「シンフォニー」を派生させた「ポリフォニー」という造語で対話論の最大の特徴である多声性を表した。さらに、レゲエやヒップホップなどのジャンルにおいて、対話論的な考察が行われてもいる（Turner, 2022）など、対話論と音楽とには高い親和性が認められる。

その背景として、バフチンは「芸術と責任」と題するエッセイにて、ひとつの人格の中で、責任と罪を伴う形にて、芸術・学問・日常は統合されなければならないと主張している。ジャンルにも強い関心を寄せているバフチンは、音楽芸術と学問、日常性との関係性を対話的に論ずることにも触れているはずである。

今回の文献調査では、以下の 2 つの文献を分析対象とした。戸谷（2016）は、J ポップ 15 曲の歌詞を読み解き、先生と真衣（大学生）との対話を通して、哲学の根本思想について紹介している。J ポップが芸術、哲学が学問、先生と真衣との対話が主に日常について言及しているため、芸術と学問、日常が見事人格の中で対話する形式をなしている。鈴木（2022）では、戸谷では触れられていない音楽的要素に加え、政治社会にまで言及されており、考察する対象の幅の広さの可能性を感じさせる。これら 2 作品には、芸術・学問・日常がリリック分析を通して交差し合う様が描かれている。

音楽芸術の重要性はコロナ禍で再認識されたが、学問は、芸術、日常の間のさらなる関係性を確認する責任を有し、今後もこれら複合的な交差の対話的考察を継続していきたい。

引用文献

スージー鈴木（2022）. *桑田佳祐論*　新潮社

Turner, E., (2022). *The discourse of protest, resistance and social commentary in reggae music: A Bakhtinian analysis of pacific reggae.* Routledge.

出口朋美・小坂貴志（2022）. 多文化社会の対話的成り立ち−両義・多声的ラップのリリック内容分析を通して−　*「縁側」知の生成に向けて　多文化関係学という場の潜在力* 明石書店, 111-111.

戸谷洋志（2016）.　*J-POP で考える哲学　自分を問い直すための 15 曲*　講談社

スピーチ・プレゼンテーション演習における聴く力の育成
―フィードバックに焦点をあてて―

川野　優希（立教大学大学院）

日本でもプレゼンテーションなどのオーラルコミュニケーション教育が重視されるようになったが、「話す」ことに比べて「聴く」ことの育成は依然として軽視されている。しかしながら、コミュニケーションは双方向のやり取りであり、「聴く」ことは「話す」ことと等しく重要な役割を果たしている。加えて、他のコミュニケーション行為と同様に、聴くことにも適切な訓練が必要である。特に対話場面では意識される聴くことも、スピーチやプレゼンテーションなどの 1 対多数のコミュニケーション場面では、より話し手に焦点があたり、聴き手の役割が軽視されやすい。スピーチやプレゼンテーションもコミュニケーションの一形態である以上、聴き手の育成も必要不可欠であるが、先行研究においては、聴き手に焦点をあてたスピーチ/プレゼンテーション教育に関する実践研究はほとんど見当たらない。

そこで本研究では、スピーチ/プレゼンテーション教育における聴く力を育成するための効果的な教材および教育手法を明らかにすることを目的に、専門学校生を対象とした教育実践研究をおこなった。今回の発表では、話し手に対する適切なフィードバックを促すための教材や教育手法を中心に報告をする。

6 ヶ月間にわたる教育実践の結果、話し手と聴き手の間にはフィードバックに対する認識のギャップがあること、聴き手によるネガティブフィードバックの質量を向上する必要があることが明らかになった。また、フィードバックの指導において、一定の型を導入することや、第三者によるサンプルスピーチ動画を用いることが効果的に働いた。さらに、スピーチの準備段階とスピーチ後といったフィードバックをするタイミングも考慮する必要性があることがわかった。最後に、男子学生よりも女子学生の方がネガティブフィードバックをすることに強い抵抗感を抱いていることが示唆された。

インクルーシブディベートに向けた基礎的検討

上土井　宏太（九州大学大学院）
竹中　野歩（九州大学）
中川　詩奈（九州大学）
井上　奈良彦（九州大学）

ディベートは、様々な分野で教育手法として用いられており、その有効性が数々の研究によって確認されている。一方で、本研究チームが課題と感じている点は、この有効な教育手法であるディベートにアクセスできない人々が存在していることである。特に、教育という文脈で「合理的配慮」が求められる場面において、人前で話すことが難しい学生にとってディベートはハードルが高く、これまで実践が難しかった。具体的な事例として、吃音症を患っている学生にとって、人前でスピーチを行うことはハードルが高い（菊池, 2021）。

この問題を解決するために、研究チームが目をつけたのが、人工音声を用いたディベートである。人工音声を用いることで、人前で話す必要がなく「合理的配慮」を行うことができ、さらにディベートを実践することができるので、ディベートによって得られる教育効果を得ることができる可能性がある。このようなディベート環境を実現する上で、人工音声を用いることでディベートにおける勝敗の判定やスピーチの評価についてどのような影響が及ぶのか検討を行うことは重要である。

本研究では、まず、実際のディベートの録画の文字起こしを行い、ボイスチェンジャーを用いて音声変換を行ったディベートを作成した。その 2 つのディベートを、ディベート経験者・未経験者に視聴してもらい、勝敗・勝敗の理由・スピーカーの順位を記入してもらい、分析を行った。さらに、個別の学生に対する半構造化インタビューも行い、音声変換有り・なしのディベートに対して抱いた感情についても明らかにした。発表当日は、人工音声を用いたインクルーシブディベートの形式についての提言を行い、ディベート経験者・未経験者からのフィードバックをいただくことで、よりよいディベートの形式について議論を行いたい。

引用文献

菊池良和(2021)「吃音患者が自己実現の欲求をもつためのマズローの欲求段階説」『音声言語医学』62(3), pp. 181-185

モノのコミュニケーションを考える
―ぬいぐるみ病院を事例として―

宮脇　かおり（桃山学院大学）

本研究はぬいぐるみを題材に、モノのコミュニケーション理論化の可能性を探ることを目的とする。ぬいぐるみは生命を持たない単なる布と綿の集合体であり、ぬいぐるみからの返事はすべて所有者の独り言である。ぬいぐるみとの会話は、自己内コミュニケーションのひとつとして論じることも可能ではある。しかしぬいぐるみとのコミュニケーションは会話だけに留まらない。むしろ、触れる、抱きしめるといった身体接触が重要視される。こういった形でのコミュニケーションは自己内コミュニケーションだけでは説明がつかない。

まず注目すべき思想の枠組みとして、物質性を積極的に論じる「新しい唯物論(New materialism)」が挙げられる。新しい唯物論は、人＝主体、物＝客体という構造を否定し、非人間/人間、物/言説の境界を脱構築しフラットな存在論から出来事を分析する（楠見 2021,p.30）。しかし新しい唯物論にはモノの「死」「時間」といった次元を射程に入れられていないという批判もある（ザルテン・北野 2018）。

発表では、モノに刻まれた時間や死の兆候を描き出し得る題材としてぬいぐるみ病院を取り上げる。ぬいぐるみ病院とは、「ぬいぐるみ法人もふもふ会」が運営するぬいぐるみ修理サービスである。特に興味深いのが、ICU（集中治療室）で行われるという「皮膚移植手術」（ぼろぼろになった布部分の修理）である。修理はしたいが気に入っているぬいぐるみの劣化を含めた外見や匂い、触り心地をそのまま維持したいという思いに対し、ぬいぐるみ病院は元々の皮膚を温存する手法を用いるためそのぬいぐるみの存在は変わらないという説明を行う。これは個々のぬいぐるみに刻み込まれた持ち主との時間、そしてそれらが醸成する唯一性の尊重と言える。これらは新しい唯物論に抜けていたモノの時間性を示すエビデンスとなる。ぬいぐるみは日々持ち主とコミュニケーションを行っており、その痕跡を自身の身体に留め続けていると言えよう。

引用文献

楠見友輔(2021)「ニューマテリアリズムによる教育研究の可能性:物と人間の関係に焦点を当てて」『教育方法学研究 46』

ザルテンアレクサンダー・北野圭介(2018)「1 新しい唯物論の可能性とその限界―兆候としてのモノ」北野圭介編『マテリアル・セオリーズ：新たなる唯物論にむけて』京都：人文書院

ポスト・コンテンツツーリズムにおける場所・モノの資源化
―コンテンツの錯綜がひきおこす観光のコンフリクト―

齋藤　光之介（法政大学大学院政策創造研究科修士課程）

「コンテンツツーリズム」とは、映画や小説、アニメといった「コンテンツ」に動機づけられた観光である。本研究では、とりわけアニメに動機づけられたそれ、すなわち「アニメ聖地巡礼」の現場のおけるコミュニケーションをテーマとして取り上げる。アニメ聖地巡礼をめぐる従来までの研究では、アニメの「聖地」は熱心なファンによって「発見」され、様々なメディアをつうじて一般的な認知を獲得していくことで段階的に成立していくとされる(岡本 2018)。しかし、今日におけるアニメ聖地巡礼においては、Google ストリートビュー等をもちいて短時間で「発見」され、SNS 等で即座に情報が拡散されることもしばしばであり、そうした一連のプロセスは消滅しつつある。また、コンテンツの著作権者や「聖地」のある地域社会が、そうした情報発信を積極的におこなっている事例も少なくない。

このような「ポスト・コンテンツツーリズム」と指呼しうる状況においては、そもそも観光者を受け入れるリソースが豊富な、いわゆる「観光地」が「聖地」として選定される傾向にある。コンテンツツーリズムに訪れるファンたちは、「観光地」の観光資源を利用し、キャラクターが描かれた絵馬を奉納したり、訪問者が自由に書き込めるノート（「観光地ノート」）に書き込みをおこなったりする。本研究では、こうした場所・モノを媒介としたメッセージ交換を分析の俎上にのせていく。

より具体的には、アニメ『ゆるキャン△』の舞台となった静岡県浜松市の浜名湖佐久米駅において、「観光地ノート」への書き込みがアニメに関する記述を中心に増加していることを取り上げる。これは、ファンによるコミュニケーションが活発化した証左といいうる一方で、既存の観光資源を流用した予定調和的な実践でもある。

以上のような議論から、観光資源の豊富な「場所」にコンテンツが集中している状況を示す。そして、その場所・モノをメディアとして媒介されるファンたちのコミュニケーションが、今日におけるコンテンツツーリズムを構築していく過程を考察する。

引用文献

岡本健(2018)『アニメ聖地巡礼の観光社会学――コンテンツツーリズムのメディア・コミュニケーション分析』法律文化社

恋活・婚活（自律的出会い）におけるツール選択に関する研究

友池　梨紗（愛知淑徳大学）

かつて日本の皆婚社会を支えていたのは、見合い結婚や職場を通じた出会いによる職縁結婚だった。そんな見合い結婚や職縁結婚の裏側には、当事者の結婚の面倒を見てくれる世話好きな個人や企業が存在した。それらの存在がなくなった今、当事者自ら交際相手と出会うルートを見いださなければならない。しかし、自分に合う相手と出会い、交際相手になるまでに関係を構築するには相当のコストが不可欠となる。結果、未婚者で結婚意向のある者の半数近くが結婚していない理由として「適当な相手にめぐりあわないから」を挙げている。

筆者は、変化を続ける男女の出会いがその後の関係構築のコミュニケーションプロセスにどのような影響を及ぼすのか調査を行っており、恋愛交際に結びつく出会いは大きく２つに分けられると考えている。学校や職場などの日常生活の場で偶然生じる「偶発的出会い」と、恋活・婚活のツールを活用して生じさせる「自律的出会い」である。

昨今の出会いの変遷から今後は自律的出会いの受容が高まることが予想される。そして、２人の関係発展を促進してくれる世話好きの個人が欠如する現代では、恋愛交際を希望する一人ひとりが交際相手と出会い、関係を深め、交際関係を育む必要があり、そこに不可欠なコミュニケーションの観点から調査を進めることは喫緊の課題である。

本発表で共有する内容は恋活・婚活のツール選択に関する調査第二弾の結果である。恋活・婚活に活用されるさまざまなツール（マッチングアプリ、街コン、結婚相談所など）の特徴を割り出し、利用者の性格、価値観、置かれた環境などから合っているツールを示すことができれば、これから恋活・婚活を始めようとする個人や恋活・婚活サービスを提供している事業の一助となるだろう。

個人の認知・心理的特性の歪みが他者のコミュニケーションへの評価に与える影響とその関連性の解明
―完璧に見える人物が癇に障るのはなぜか―

小山　哲春（京都ノートルダム女子大学）
佐藤　桃華（京都ノートルダム女子大学）

一見完璧に見える人物に対し、素直に尊敬したり、高く評価をしたりする人が多い中、「なんか怪しい、胡散臭い」というネガティブな評価をする少数派が存在する。本研究では、このようなある意味で「歪んだ見え方」に影響を及ぼす心理・認知的な個人特性とその関係性を明らかにすることを目的とし、82 名の参加者（日本語話者）を対象に、シナリオを用いた擬似実験デザイン研究を行った。

参加者は、2 人の人物(人物 A…誰から見ても高い評価を得られるようなコミュニケーションスタイルの人物、人物 B…一見「完璧な人」ではあるが、そのコミュニケーション・スタイルに何らかの意図性や演技性を感じさせる可能性のある人物) が登場するシナリオを読み、それぞれのコミュニケーション評価を行なった。同時に、参加者の心理・認知的個人特性（「Self-Monitoring」、「他者軽視」、「攻撃性」、「認知必要性」、「自己愛尺度」、「自己意識尺度」、および本研究で独自に概念化した「他者の反応への関心」）を計測し、特に人物 B を猜疑的に否定的評価した参加者を対象として、個人特性と他者評価の関連を分析した。

分析では、人物 A,B の評価差を基準に 2 つのグループ（「高低群」: 人物 B への猜疑的評価高、人物 A への猜疑的評価低と、「低低群」: 人物 A,B への猜疑的評価共に低）を構成し、*t* 検定を用いて個人要因（主に、「人物 A/B は印象操作を行っており、それがバレていないと思っているか」と「あなたは、人物 A/B をどこか胡散臭いと思うか」という項目）の平均値を比較した。結果、特に猜疑心、仮想的有能感、他者の反応への関心に有意な差が見られ、いずれも高低群の方が高かった。この結果から、こうした少数派のコミュニケーション評価は、認知必要性や Self-Monitoring(演技性)などの社会認知的スキルや能力に基づいた「正しい見方」ではなく、むしろネガティブな心理特性の影響を受けた「歪んだ見え方」である可能性が示唆された。

Beyond the Family and Normativity
—A Queer Reading of *Spy x Family*—

Naoki Kambe (Rikkyo University)

Tatsuya Endo's *Spy x Family* is one of the most successful media productions (e.g., anime, manga) in the last few years. It is about the Forgers, a fake family formed by Loid Forger, Yor Forger, and Anya Forger. Each character has "a secret self they don't show to other people" (Endo i); Loid is a spy called "Twilight"; Yor is an assassin known as Thorn Princess; Anya, a six-year-old girl, is a telepath. As part of Loid's spy mission requiring him to find a wife and a child, the three meet and form a fake family. For this reason, the Forgers could be seen as a queer family "where something about the structure / nature / being / doing of the family is inherently queer" (Manning 69). This family in turn reflects as well as challenges the image of a normative family or the nuclear family ideal. In this paper, I attempt to perform a queer reading of *Spy x Family* regarding this normativity or ideal. In so doing, I employ queer theory which critiques, destabilizes, subverts, and challenges normativity (McCann and Monaghan 1). In particular, I pay attention to the following three interrelated normativities: nuclear family ideal, fatherhood & motherhood, and heteronormative & genetic intimacy. Through this analysis, I argue that the Forgers challenge normativity by showing their doubleness or dilemma being normal and queer and show a new mode of doing intimacy which is not based on romance nor genetics but on the commonality shared by the three as "social outliers from traumatic backgrounds who have been displaced from any chance at a 'normal' upbringing in a 'normal' family" (Henderson par. 23).

Work Cited

Endo, Tatsuya. *Spy x Family 1.* Translated by Casey Loe. VIZ, 2019.

Henderson, Alex. "Queer Resonance and Critiquing Heteronormativity in SPY x FAMILY." *Anime x Feminist* 15 June 2022. https://www.animefeminist.com/queer-resonance-and-critiquing-heteronormativity-in-spy-x-family/ accessed 25 January 2023.

Manning, Jimmie. "Queering Family Communication." *Navigating Relationships in the Modern Family Communication, Identity, and Difference,* edited by Jordan Soliz and Warner Colaner Feldman, pp. 69-

85. Peter Lang, 2020.

McCann, Hannah and Whitney Monaghan. *Queer Theory Now*. Red Globe Press, 2019.

ファンタジーテーマ分析によるナイキ CM のリプライにおける「日本人性」

杉原　奈南実（立教大学大学院）

本研究では、マジョリティとしての「日本人性」の意味を明らかにすることで、「日本人」中心の社会構造を問い直そうとした。分析では 2020 年に Twitter で公開されたナイキの CM のリプライで集団内の世界観を明らかにし、「日本人性」を明らかにすることを目的として、ファンタジーテーマ分析を用いた。

現代日本では海外にルーツを持つ人が増えているが、民族や国籍の差別問題は深刻である。民族や国籍に関わる差別問題の解決のためマイノリティと呼ばれる人たちの声を聞く研究が多くある一方、多様化する日本社会でマジョリティとしての「日本人性」の意味を問い直す研究は多くない。マジョリティ研究の一つであるホワイトネス研究を参考に、マジョリティとしての「日本人性」がどのように構築されているかを明らかにする。

ナイキが 2020 年 11 月 28 日に Twitter で発表した CM に寄せられたリプライ 188 件を本研究の分析対象とし、ファンタジーテーマ分析を用いてリプライ欄でどのように「日本人性」が構築されているかを明らかにする。この CM では「日本人」だと思われる女の子、在日コリアンの女の子、父親が黒人で母親が「日本人」だと思われる女の子 3 人が主人公である。3 人は別々に生活していてそれぞれ学校でいじめを受け、周りから好奇の目で見られ、家族と衝突していて、周囲と異なっていることに葛藤している。最終的に 3 人同じサッカーチームでプレイし、「いつか誰もがありのままに生きられる世界になるって？」「でもそんなの待ってられないよ」というセリフを言う。この CM のリプライには「日本人」と「外国人」の対立構造があり、明治期以降の「日本人論」やナショナリズムとの関連性から「日本人性」とナショナリズムを本研究の軸概念とした。

日本コミュニケーション学会
第 52 回年次大会
プロシーディングス
2023 年

Japan Communication Association
52nd Annual Convention Proceedings

目次
Contents

公的言論 **public discourse**

近藤栄蔵・議会主義・無産政党
—近代日本のプロレタリア雄弁の予備的考察その 2—. 24
青沼　智（国際基督教大学）

岸田首相の言語感覚. 26
東　照二（アメリカ合衆国ユタ大学）

ポピュラー音楽とコミュニケーション—芸術・学問・日常における対話—. 28
小坂　貴志（神田外語大学）

コミュニケーション教育 **communication education**

スピーチ・プレゼンテーション演習における聴く力の育成
—フィードバックに焦点をあてて—. 30
川野　優希（立教大学大学院）

インクルーシブディベートに向けた基礎的検討. 33
上土井　宏太（九州大学大学院）・竹中　野歩（九州大学）・
中川　詩奈（九州大学）・井上　奈良彦（九州大学）

文化実践 **cultural practice**

モノのコミュニケーションを考える—ぬいぐるみ病院を事例として—. 35
宮脇　かおり（桃山学院大学）

ポスト・コンテンツツーリズムにおける場所・モノの資源化
—コンテンツの錯綜がひきおこす観光のコンフリクト—. 38
齋藤　光之介（法政大学大学院政策創造研究科修士課程）

対人コミュニケーション **interpersonal communication**

恋活・婚活（自律的出会い）におけるツール選択に関する研究. 41
友池　梨紗（愛知淑徳大学）

個人の認知・心理的特性の歪みが他者のコミュニケーションへの評価に与える影響とその関連性の解明
—完璧に見える人物が癇に障るのはなぜか—. 43
小山　哲春（京都ノートルダム女子大学）・佐藤　桃華（京都ノートルダム女子大学）

メディア分析 **media analysis**

Beyond the Family and Normativity—A Queer Reading of Spy x Family—. 46
Naoki Kambe (Rikkyo University)

ファンタジーテーマ分析によるナイキ CM のリプライにおける「日本人性」. 48
杉原　奈南実（立教大学大学院）

近藤栄蔵・議会主義・無産政党
―近代日本のプロレタリア雄弁の予備的考察その 2―

青沼　智（国際基督教大学）

本研究では、明治初期、西洋より日本に輸入され自由民権運動の波に乗り「弁論ブーム」を巻き起こしたレトリックの、大正から昭和にかけての政治運動（大正デモクラシー、普選運動）の中での展開を考察する。具体的には、やはり明治初期、日本に持ち込まれたマルクス・エンゲルスの思想に触発された社会主義・共産主義・無産者政治の活動の一環としての雄弁（弁論、演説）実践およびそれに関する教育・啓蒙活動について論述する。

昨年の年次大会では近藤栄蔵（1883―1965）により著された『プロレタリア雄弁学』（1930）に焦点を当て、マルクス・レーニン主義の政治言説戦略たる宣伝扇動（「アジ・プロ」）と近藤が描いたプロレタリア雄弁との関係を歴史的・理論的に考察した。今回は、自身創立メンバーであった日本共産党と袂を分ち無産政党に参加した近藤の議会主義と彼のレトリック論との関係が如何様であったか、また近藤が参加したいわゆる無産政党が主催した「政治学校」において、雄弁（弁論、演説）がいかに教授されていたのかを考察したい。

政府による共産党・共産主義者弾圧を逃れ 1924 年にソビエト連邦に渡った近藤は、その約 2 年後に帰国した。運動方針を巡るいわゆる「アナ・ボル論争」が激化する中、1925 年に制定された普通選挙法を契機とし、議会政治・国政選挙への参加を目論み社会主義・共産主義者・労組指導者らの手によって無産政党が次々と設立された時期であった。近藤は当時非合法活動を強いられていた共産党には復党せず、日本農民党・日本労働党・日本大衆党等の（合法）無産政党に参加し、国内での政治活動を再開する（近藤、1949; 同志社大学人文研究所、1970）。当時非合法であった共産党に所属したままでは、公然と政治に参加することができなかったこともあるだろうが、元より近藤は「議会政策派」であり、片山潜や堺利彦同様、無産階級の積極的な議会政治への参加を主張していた（堺・近藤、1924）。つまり 1930 年に『プロレタリア雄弁学』を刊行した当時の近藤にはマルクス・レーニン主義に加え議会主義へのコミットメントがあったはずであり、本研究では彼のプロレタリア雄弁学に後者がどのような形で反映されていたのかについての探究を試みる。

また 1920 年代から 30 年代にかけ日本全国で開催された無産政党主催の政治学校での雄弁教育には近藤以外の人物が関わっていたことが分かっている（解放社、1931）。そこに浅沼稲次郎の名があることは注目に値する（田所、1932）。浅沼は早稲田大学雄弁会出身であり、さらに弱小無産政党所属のいわゆる泡沫候補ではなかった。第二次世界大戦後は日本社会党の委員長にも就き、1960 年の自民党・社会党・民社党党首による討論会の最中、右翼テロリス

トの手により非業の死を遂げた人物である（『--没後 50 年--浅沼稲次郎とその時代』、2010）。浅沼のいわば「和製」プロレタリア雄弁と、米国中等・高等教育の雄弁・討論教育からの影響（School Happenings、1906）が認められる近藤のプロレタリア雄弁の間には、どのような相違があるのだろうか。この点についても本研究は探究を試みたい。

大正・昭和の日本の雄弁・演説・弁論に関する研究は、明治と比較すると極端に少ない。本研究では、本格的な研究の準備の一環として、特に法政大学・大原社会問題研究所および同志社大学・人文科学研究所（「近藤栄蔵文庫」）が所蔵する一次資料を重点的に調査した。また本研究は「近代日本のレトリックと階級闘争 —「プロレタリア雄弁学」の理論と源流 」（日本学術振興会科学研究費助成事業基盤研究）の助成を受けている。

引用文献

解放社（編）（1931, S6）『プロレタリア雄弁法教程』解放社。
近藤栄蔵（1930）『プロレタリア雄弁学』平凡社。
近藤栄蔵（1949）『コムミンテルンの密使』文化評論社。
堺利彦・近藤栄蔵（1924）『無産階級と議会』燎原社。
田所輝明（1932）『無産党十字街』先進社。
同志社大学人文研究所（編）（1970）『近藤栄蔵自伝』ひえい書房。
『--没後 50 年--浅沼稲次郎とその時代』（2010）早稲田大学大学資料史センター。
School Happenings. (April 1906). *The* [California] *Polytechnic Journal, 1*

岸田首相の言語感覚

東　照二（アメリカ合衆国 ユタ大学）

本研究では、日本の岸田首相の言語力を主な材料として、最近の内閣支持率低下の背景にあると考えられる、岸田首相の政治言語力を研究してみよう。その際に、政治言語の本質的な要素として、聴き手と話し手の間で、日々、行われるスピーチのポイントに焦点を当ててみることにする。アメリカのジョージタウン大学で、言語学を教授、研究しているタネン（Tannen 2007, 2020）および他の研究者たちは、関与戦略（involvement strategy）という考え方を元に、さまざまな場面で観察されるスピーチ全般を、丹念に調べている。その理論の基本的な主張は、「個人各々が、自分たちを結びつける内的で、感情的、情緒的な繋がりのことであり、さらには、場所、物、行動、記憶、言葉などにも関係する関係性」のことであると定義されている（e.g., Tannen 2007）。さらに、この関与戦略は、会話の中で、話し手から聞き手に一方的に与えられるものというよりは、個人間でお互いに、共同で達成されるものである、とも定義している。ガンパーズ（Gumperz 1982）によると、さらに、この関与性は、観察可能なもので、行動的なものである、となる。さらに、メリット（Merritt 1982）はお互いの契約（mutual engagement）である、またバクチン（Bakhtin 1981）は、全ての言語使用は、そもそもお互いに「対話的」なものである（all language use is dialogic）と記述している。これらをまとめてみると、関与戦略とは、聴き手と話し手が「共同」で作り上げるもので、そこには、必ずお互いに、一緒になって、協力して達成、理解、納得されるものだとなる。もっと、わかりやすく言うと、話し手が聴き手にもなり、さらに聴き手が話し手にもなる、つまり、お互いに、文字通り、「共同」で会話を成り立たせるということになる。そして、その根本にあるのは、情緒的、心理的、感情的な「繋がり」だということになる。このお互いの情緒的な繋がり（emotional connection）こそが、話し手、聞き手の間で起こる会話の根本にある、という主張である（Azuma 2021, 2022）。

この理論を元に、岸田の政治言語を考えてみよう。岸田は、そのもっとも強い主張の一つとして、「聞く力」を上げている。自分には、話す力に加えて、それ以上に人の声に耳を傾ける「聞く力」が想像以上にある、という主張だ。実際、岸田は人当たりはいいし、聞く力を誰よりも強く兼ね備えているようにも見える。しかしながら、単純に「聞く力」と言っても、聞きっぱなしではなく、そこには強い発言と内容と、そしてそれを成し遂げる実行力が備わっていないといけない。必死さ、強い覚悟、誰からも反論されないような深い内容、行動がないといけないことになる。こう考えると、今までの岸田には、「聞く力」が存分に発揮されているとは言い難いようだ。

この一つの例として、岸田内閣で、ここ２ヶ月で四人もの閣僚が辞任に追い込まれた際の岸田の発言を見てみよう。まさに、「辞任ドミノ」と言っても異様な状態だが、岸田からは辞任にあたっての言葉があまりにも簡潔すぎる、内容が全くない、紋切りの短い発話で終わっていることがわかる。旧統一教会問題などで、辞任に追い込まれた山際経済担当大臣について、１０月２４日、岸田は次のように述べている。

岸田：任命責任については、えー、えー、当然感じております。この任命責任について感じているからこそ、今後の審議、職責をしっかりと果たすことによって、その職責を果たしてい

きたいと思っております。

つまるところ、なんら具体的な内容、経過、問題点などは一切、語られていない。単純に、任命責任を痛感している、と述べているだけである。この「辞任ドミノ」は、さらに次のように続行していく。

１１月１１日、葉梨法務大臣の更迭について、岸田が述べた言葉は、次のコメントだけである。

岸田：私の任命責任についても、重く受け止めております。

１１月２１日、寺田総務大臣の更迭について、岸田は次のように述べている。

岸田：私自身の任命責任について、重く受け止めております。

１２月２７日、秋葉復興大臣の更迭について、岸田は次のように述べている。

岸田：任命責任について、重く受け止めています。

これら４つの「辞任ドミノ」について、要するに、岸田はなんら具体的な内容、経過などを発することなく、話し手である岸田からの一方的な発言に終始していることが、明確に見えてくる。聞き手であるマスコミ、国民からの反応は無いに等しい。つまるところ、会話、言葉、発言とは、一方的な方向ではなく、聞き手も交えた、相互行為、関与戦略、共同行為だと言える。この観点から見ると、岸田の発話は、あまりにもかけ離れたものであることがわかる。ここから言えることは、岸田の言語仕様とは、相互に発生する「会話的」なもの、共同作業でなければならないと考える主張から、かなり逸脱したものであると言えるだろう。

参考文献

Azuma, S. (2021). A study of former Japanese Prime Minister Abe's speaking style in 2020: Listener-oriented or speaker-oriented? *Athens Journal of Mass Media and Communications*, 8, 1-17.

Azuma, S. (2022). 岸田首相の言葉はなぜ響かないのか。時事通信、政界ウエッブ、https://www.jiji.com/jc/v8?id=20221007seikaiweb

Bakhtin, M. M. (1981). *The dialogic imagination*. Austin: The University of Texas Press.

Gumperz, J. (1982). *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.

Merritt, M. (1982). Distributing and directing attention in primary classrooms. *Communication in the classroom*. Ed. by Cherry-Wilkinson, L. 223-44. New York: Academic Press.

Tannen, D. (2007). *Talking Voices*. Cambridge: Cambridge University Press.

Tannen, D. (2020). Finding My Father. New York: Ballantine Books.

ポピュラー音楽とコミュニケーション
―芸術・学問・日常における対話―

小坂　貴志（神田外語大学）

1. はじめに

新型コロナ感染対策の一環として、音楽活動は厳しい制限を受けたことは私たちの記憶に新しい。これにより音楽活動家や愛好家の多くが影響を受け、国は音楽を軽視しているとの意見すら出された（坂田、2022）。このような状況下にあって、コミュニケーション学は音楽に対してどのような知見を提供してくれるのだろうか。本研究は、ポピュラー音楽全般と対話論との接点を探るために実施する予備的文献調査である。

2. ポピュラー音楽とコミュニケーション

音楽は人間の生活に欠かすことができない芸術である（グレイシック、2019）。超一流アスリートらがイヤホンで曲を聴きながら試合に向けて集中力を高めようとしている様子が中継で放映されたり、音楽セラピーを治療に採り入れたりするなど、音楽をはじめとする芸術が人類を豊かにしてくれるのは、私たちの日常的な経験と共通する（吉田、2022）。

本研究では、日常に強い影響を与えるであろうポピュラー音楽を対象とする。筆者はラップシーンが映し出す日本社会を対話論的に素描する共同研究を行ってきた（出口・小坂、2022）が、対話論と音楽とには高い親和性が認められる。その一方で、ポピュラー文化に焦点を当てたカルチュラルスタディーの台頭とともに、音楽はコミュニケーション学でもこれまで研究対象となってきている（Lull, 1992）が、そこでは、ポピュラー音楽に焦点を当てた対話論の概念は参照されてはいない。対話論を理論的参照枠に用いてポピュラー音楽全般の分析にも援用することができるのか、対話論と音楽との共通項を以下探ることにする。

3. 対話論と音楽との関係性

対話論は音楽と深い関係にある。まず、対話論を構成する要素の一つである「声」（voice）は、リリックを伴う楽曲には欠かすことができない。対話論を説いたロシア文芸批評家バフチンによると、声は一人の人格を代表させる（バフチン、2013）。さらに、文ではなく発話にこそ意味の生成単位があるとし、トーン、イントネーション、リズムの違いを意味解釈に採り入れたが、声こそがこれらを伝えられる。リリックを聴衆の耳に運ぶものはヴォーカリストの声であり、リリック音楽の真髄は声にこそ表れることになる（Joon, 2021）。

バフチンは、「シンフォニー」を派生させた「ポリフォニー」という造語で対話論の最大の特徴である多声性を表した。シンフォニーとは異なり、ポリフォニーでは、一定のメロディーを共有するものの、ソロの場面で即興演奏をするジャズのイメージで、多声性状況において、決して混じり合わない独立した声が互いに投げかけられる（バフチン、2013）。また、対話論を理論的枠組みとして音楽分析に援用している先行研究としてレゲエのシーンがあげられる。Turner（2022）によると、ニュージーランドで 1980 年代に流行したレゲエとそのリリックが社会的対抗言説として対話的に機能した。対話論と音楽との関係性が暗示的に

述べられている「芸術と責任」と題するエッセイの中で、バフチンは、ひとつの人格の中で、責任と罪を伴う形にて、芸術・学問・日常は統合されなければならないと主張しているが、音楽芸術にも触れていることがここには推察されるであろう。

4. J-POP リリックの対話論的分析

J-POP のリリック分析において、対話論のどの特徴とどのような関係性が認められるのだろうか。戸谷（2016）は、J ポップ 15 曲の歌詞を読み解き、先生と麻衣（大学生）との対話を通して、哲学の根本思想について紹介している。J ポップが芸術、哲学が学問、先生と麻衣との対話が主に日常について言及し、芸術と学問、日常が見事、同書の中で、かつ読者の人格の中で、対話を促すであろう構成やスタイルを成していると結論づけることができる。鈴木（2022）では、戸谷では触れられていない音楽的要素に加え、政治、社会にまで言及されており、考察する対象の幅の広さの可能性を感じさせる。これら 2 作品では、芸術・学問・日常がリリック分析を通して交差し合う様が明らかとなった。

5. おわりに

音楽芸術の重要性はコロナ禍で再認識されたが、学問は、芸術、日常を統合させる責任を有している。今後もこれら複合的な交差の対話的考察を継続していきたい。

引用文献

Bakhtin, M. M. (1929). *Проблемы творчества Достоевского, Ленинград: Прибой*.（バフチン, B. B. （桑野隆（訳） （2013）. *ドストエフスキーの創作の問題* 平凡社）

坂田明（2022）. 演奏は“命”そのもの 「母」テーマのジャズ・アルバムに参加 *定年時代* 株式会社新聞編集センター, 1.

Graycyk, T. (2013). *On music*, first edition. Routledge.（グレイシック, T.（2019）.（源河亨・木下頌子（訳）（2019）. *音楽の哲学入門* 慶応義塾出版会）

スージー鈴木（2022）. *桑田佳祐論* 新潮社

Turner, E.,（2022）. *The discourse of protest, resistance and social commentary in reggae music: A Bakhtinian analysis of pacific reggae.* Routledge.

出口朋美・小坂貴志（2022）. 多文化社会の対話的成り立ち−両義・多声的ラップのリリック内容分析を通して− *「縁側」知の生成に向けて 多文化関係学という場の潜在力* 明石書店, 111−111.

戸谷洋志（2016）. *J-POP で考える哲学 自分を問い直すための 15 曲* 講談社

Lull, J. (ed.),（1992）. *Popular music and communication*, second edition. Sage Publications.

Moment Joon.（2021）. *日本移民日記* 岩波書店

吉田純子（2022）. 豊かな「個」 取り戻す芸術 *朝日新聞 2022 年 11 月 27 日*, 総合 3.

スピーチ・プレゼンテーション演習における聴く力の育成
―フィードバックに焦点をあてて―

川野　優希（立教大学大学院）

1. 研究背景

「書く」「読む」「話す」「聴く」の 4 つのコミュニケーション行動のうち、人が 1 日の中で最も時間を多く費やしているのは「聴く」ことである（Brownell, 2002）。また、効果的かつ適切に聴くことは学業、対人関係、キャリアの面など様々なメリットがあり（Wolvin, 2012）、多くの大学生にとって学ぶ意義のある能力である。

しかし、聴くことは基本的に誰もができる行為であると考えられ、聴くことの訓練や育成は軽視されてきた。とくにスピーチやプレゼンテーションなどの 1 対多数のコミュニケーション場面では、より話し手に焦点が当たり、聴き手の役割や重要性は意識されにくい。加えて、日米両国で聴き手の教育や研究の不足は指摘され続けてきたが（Janusik, 2010；益地, 2018）、その傾向は日本において特に顕著である。

聴くことも他のコミュニケーション行動と同じく「認知/知識面」「動機/感情面」「スキル/行動面」の 3 つの側面があり、その全てを視野に入れた指導が必要である（Wolvin & Coakley, 1994）。また、人前で発表することもコミュニケーションの一つであり、スピーチ中の反応、スピーチ後の質問やフィードバックなど、聴き手は重要な役割を果たしている。そのため、スピーチ/プレゼンテーション演習がその教育目的を達成するためには、聴く力の育成が必要不可欠であり、聴く力を育成するための効果的な教育手法や教材を明らかにすることが求められる。

2. 研究対象および概要

2022 年 4 月から 9 月までの間、九州地方の専門学校に通う 1 年生 7 名を対象に、聴くことの指導に焦点をあてたスピーチ/プレゼンテーションおよびディベート演習の教育実践研究をおこなった。授業期間中に、聴く力の自己評価を測定するための質問紙調査、授業内外での課題提出物の分析、教員による授業観察および研究協力者の回顧的インタビューを通して、聴く力の変化を多角的に辿っていった。

聴き手の教育において、聴くことは「建設的に応答するプロセス（a constructively responsive process）」と捉えられ、聴き手はメッセージの受け手だけでなく、（フィードバックなどの）メッセージの送り手としての役割も有している（Stein, 1999, p. 270）。Wolvin（2010）は、良い聴き手には行動として表出される話し手へのフィードバックが不可欠であり、応答をすることで聴くことが「達成（accomplished）」されると主張する。そこで、本研究では話し手に対する応答に焦点をあて、なかでもスピーチに対するフィードバックを中心に分析した。約半年間にわたる授業期間の中で、聴き手はクラスメートのスピーチ/プレゼンテーションおよびサンプルスピーチ動画に対して、フィードバック用紙を毎回記入した。記入内容は、①スピーチの要点、②スピーチで良かったまたは見習いたいと思った点、③改善した方がよいと思っ

た点、④その他、の 4 項目である。記入されたフィードバック用紙は教員に提出し、クラスメートのスピーチに対するフィードバック用紙は、次回以降のスピーチ時の参考にするよう指示した上でコピーを話し手に返却した。

3. 結果と考察

結果として、話し手と聴き手の間で、フィードバックに対する認識にギャップがあることが明らかとなった。聴き手は良かった点などのポジティブフィードバックを好む一方で、話し手は聴き手が思う以上に問題点や改善点を指摘するネガティブフィードバックに価値を置いていた。聴き手にとってネガティブフィードバックは、より批判的に聴くことを求められるため、多元的なスキルが必要となる。また、学生は批判的なコメントをすることによって相手を傷つける可能性があることを強く意識していた。一方の話し手は、自身のスピーチの質を向上させるためにもネガティブフィードバックをより多く参考として取り入れていた。したがって、こうした話し手と聴き手の間にあるギャップを埋めるために、聴き手のネガティブフィードバックの質量を向上する必要があった。

ネガティブフィードバックを充実させるためには、フィードバック用紙の良かった点や改善点の記入欄に「言語/非言語/内容」といった下位項目を追加することや、ネガティブなことをポジティブなことで挟む「サンドウィッチ・フィードバック」（feedback sandwich）などの一定の型を教えることが効果的に働いた。加えて、心理的なハードルを下げるという面で、その場にいるクラスメートではなく、第三者によるサンプルスピーチ動画に対するフィードバックも有効であった。なかでも、学生にとって関連性が強いテーマが取り上げられ、話し手に対する親近感の湧きやすいサンプルスピーチ動画では、ネガティブフィードバックの質量が大きく向上した。

また、スピーチの準備段階と発表後で話し手が参考にするフィードバックの内容が異なっていたため、フィードバックをするタイミングも考慮する必要があることが明らかになった。話し手は、準備段階では最終的な発表内容の修正のために改善点の指摘の方を参考にするが、発表後では良かった点も含め、参考にするポジティブフィードバックとネガティブフィードバックのバランスを取る傾向があった。

フィードバックの質量を向上させるための効果的な教育手法やタイミングが明らかになったことは 1 つの成果と言えるが、全体的なネガティブフィードバックの質量には個人差があり、授業内で一時的にはできていた改善点の指摘が、最後まで定着したとは言い難い。こうしたネガティブフィードバックに対する抵抗感は、クラスメートに向けての批判的な講評が相手の気分を害したり、面子を脅かすことにつながりかねないという認識（Cartney, 2010）や、学生自身の自己効力感にも影響される（Kernis, Brockner, & Frankel, 1989）。特に日本人の若者は諸外国に比べ自己肯定感が低い（本田，2020）ことも考えると、自信がない状態で相手のスピーチやプレゼンテーションの改善点を指摘することは容易なことではない。加えて、全体として男子学生よりも女子学生のネガティブフィードバックの量が少なく、回顧的インタビュー内でも「自分よりは（他の人の方が良い）」と言った発言が目立ったことからも示唆されるように、女性はネガティブフィードバックを嫌がる傾向にあった。こうしたジェンダー差もフィードバックの仕方や受け止め方に影響をおよぼしていると考えられる。今回の研究

発表では、教育実践を通して効果的であったと考えられる教材や教育手法の報告に加え、こうした文化的・社会的背景にも目を向けながら、今後のスピーチ/プレゼンテーション教育のあり方について提言していきたい。

参考文献

Brownell, J.（2002）. *Listening: Attitudes, principles, and skills*（2nd ed.）. Boston: Allyn and Bacon.

Cartney, P.（2010）. Exploring the use of peer assessment as a vehicle for closing the gap between feedback given and feedback used. *Assessment & Evaluation in Higher Education*, *35*, 551-564.

Janusik, L.A.（2010）. Listening p edagogy: Where do we go from here? In A. D. Wolvin（Ed.）. *Listening and human communication in the 21st century*（pp. 193-224）. Wiley-Blackwell.

本田由紀（2020）.『教育は何を評価してきたのか』岩波書店.

Kernis, M. H., Brockner, J., & Frankel, B. S.（1989）. Self-esteem and reactions to failure: The mediating role of overgeneralization. *Journal of Personality and Social Psychology*, *57*, 707-714.

益地憲一（2018）.『対話的に学び「きく」力が育つ国語の授業』明治図書出版.

Stein, S. K.（1999）. *Uncovering listening strategies: Protocol analysis as a means to investigate student listening in the basic communication course*. University of Maryland, College Park.

Wolvin, A. D.（Ed.）.（2010）. *Listening and human communication in the 21st century*. Wiley-Blackwell.

Wolvin, A. D.（2012）. Listening in the general education curriculum. *International Journal of Listening*, *26*, 122-128.

Wolvin, A.D. & Coakley, C.G.（1994）. Listening competency. *Journal of the International Listening Association*, *8*, 148-160.

インクルーシブディベートに向けた基礎的検討

上土井　宏太（九州大学大学院）
竹中　野歩（九州大学）
中川　詩奈（九州大学）
井上　奈良彦（九州大学）

1. 研究の背景

ディベートは、様々な分野で用いられている教育手法であり、批判的思考力、第二言語習得など幅広い能力を身につける上で有効な手段とみなされている。このような効果が見られるにも関わらず、これまでディベートにアクセスすることができない人々がいることを研究チームは課題だと感じてきた。

研究チームが注目している一つの対象は、人前に出ることが苦手であることによってディベートにアクセスできていない人々である。特に、教育という文脈で考えたときには、2016年4月に「障害者差別解消法」が施行され、国立大学においては、障害者への不当な差別的な取り扱いの禁止や、合理的配慮を行うことが義務付けられている。学生が必要とする合理的配慮は様々であり、それぞれの状況に応じて、対話を行いながら対応を検討する必要性が指摘されている（田島・他, 2022）。実際に、合理的配慮が必要な対象として、大勢や人前で話すことに対する心理的緊張の緩和が挙げられている（徳永・田中, 2022）。人前で話すことが苦手な理由の一つとして吃音が挙げられる（菊池, 2021）。吃音症の学生は言葉が詰まる事が多く、特に人前で話すような緊張する場面においては流暢に話すことが難しいと考えられている。人前でスピーチを行うことが求められるディベートにおいては、特に心理的緊張が発露する場面が多いことが予想され、これらの人々がディベートにアクセスできる環境を実現することが本研究の目的の一つである。

本研究では、人前に出ることに対する抵抗感がある人々がディベートを行うことができる環境を作る上で重要な、人工音声を用いたディベート形式について基礎的検討を行っている。具体的には、声を出すことが難しい学生がタイピングでスピーチを作成し、それをボイスチェンジャーを通して変換することでディベートを行う可能性について探求を行った。

2. 研究手法

まず、既存の日本語準備型ディベートの試合の録画の文字起こしを行い、人工音声生成ソフトウェアを用いて、全ての音声を人工音声により置き換えたファイルを作成した。対象としたディベートの試合は2試合であり、論題はそれぞれ「日本は、死刑を廃止すべきである」と「日本は、外国人労働者の受け入れを拡大すべきである。」であった。

通常形式のディベート及びボイスチェンジャーにより音声変換を行った2試合をそれぞれ学生に視聴してもらった。その後、判定・判定の理由・スピーカーの順位を記入してもらい、2つのディベートの間で判定やスピーカーの順位に違いはあるのか考察を行った。記入が終わった後、各学生に半構造化インタビューを行い、ディベートを聞いた感想、判定の理

由などについて聞き取りを行った。実験の対象としたのは、日本語準備型ディベート経験者、英語即興型ディベート経験者、ディベート未経験者の 3 群であり、この群の間で違いが見られるかどうかも併せて考察を行った。

3. 結果と考察

それぞれのディベートについて、音声変換ありのディベートと音声変換なしのディベートの判定を比較した結果、一部に違いが見られた。また、スピーカー順位についても、音声変換なしのディベートでは 1 位であったスピーカーが 4 位になることがあるなど、音声変換の有無による違いが確認された。サンプル数が限られていることから、統計的な情報を導き出すには至っていないものの、アクションリサーチとして、これらの結果の違いについて考察を行うことは、今後のインクルーシブディベートの可能性を探索する上で重要な点である。

これらの結果について、各学生へのインタビュー調査の結果を総合的に考察し、違いが発生した原因について考察を行う。また、ディベート経験の有無及び経験しているスタイルが異なる群間において見られた違いについても考察を行い、インクルーシブディベートを実現する上で重要なジャッジ（審査員）のあり方についても分析を行う。

当日はこれらの結果を踏まえた上で、ボイスチェンジャーを用いたディベート形式の可能性と授業等での導入の実現可能性について提言し、議論を行いたい。

引用文献

菊池良和（2021）「吃音患者が自己実現の欲求をもつためのマズローの欲求段階説」『音声言語医学』62(3), pp. 181-185.

田島晶子・岸川加奈子・中野光里・横田晋務・田中真理（2022）「合理的配慮実施過程における書面による建設的対話の現状と課題 ： 配慮依頼文書への回答から」『基幹教育紀要』 8, pp. 155-166.

徳永亜希雄・田中浩二（2022）「病弱・身体虚弱のある児童生徒への心理面に関する合理的配慮の検討―インクルーシブ教育システム構築支援データベースの実践事例の検討を通して―」『横浜国立大学教育学部紀要. I, 教育科学』5, pp. 159-168.

モノのコミュニケーションを考える
―ぬいぐるみ病院を事例として―

宮脇　かおり（桃山学院大学）

本研究はぬいぐるみを題材に、モノのコミュニケーション理論化の可能性を探ることを目的とする。ぬいぐるみは生命を持たない単なる布と綿の集合体であり、ぬいぐるみからの返事はすべて所有者の独り言である。しかし、ぬいぐるみがそこに存在するからこそ紡ぎ出されることばや感情がある。人形文化研究者の菊地浩平(2018)は、ぬいぐるみが「もしかしたらモノ以上の存在である可能性は決して否定できない」(p. 19)として、ぬいぐるみと人とのコミュニケーションの可能性を示唆している。

ぬいぐるみとの会話は、自己内コミュニケーションのひとつとして論じることも可能ではある。しかしぬいぐるみとのコミュニケーションは会話だけに留まらない。むしろ、触れる、抱きしめるといった身体接触が重要視される。こういった形でのコミュニケーションは自己内コミュニケーションだけでは説明がつかない。さらに文化人類学者の奥野克己(2021)は、「ぬいぐるみは話しかけられるたんなる客体ではなく、時には、人間に語りかける主体にもなる」と主張する（p.158)。

そこでまず注目すべき思想の枠組みとして、物質性を積極的に論じる「新しい唯物論(New materialism)」が挙げられる。新しい唯物論は、人＝主体、物＝客体という構造を否定し、非人間/人間、物/言説の境界を脱構築しフラットな存在論から出来事を分析する（楠見 2021,p.30)。その中でもブリュノ・ラトゥールらが提唱したアクターネットワーク理論（以下 ANT）はモノも人と同様にコミュニケーション主体となると主張する。ぬいぐるみをコミュニケーションの主体として積極的に理解しようと試みる本研究も、こういった新しい唯物論の流れの上にあると捉えられる。さらに菅野(2019) は、新しい唯物論は「物質を物質として我々に認識させる条件とは何なのかという問いまで含めて考察しようとしている」(p.94) と指摘する。こうした視点は、ぬいぐるみ所有者がぬいぐるみを単なる物としてではなく、唯一無二の家族や親友として認識しているという事象を読み解いていくために有用である。

さらにぬいぐるみは、新しい唯物論に欠けているとされる「死」や「時間」の問題を論じるひとつのきっかけになり得る。アレクサンダー・ザルテンは、新しい唯物論はすべてに生命のようなエージェンシーを与えることは語るが、死や人間の時間の有限性については語らないと指摘している(ザルテン・北野,2018,p.37-38)。ANT についても、「モノのうちにある隠されたいかなる深い次元も廃し、またモノを行為＝活動に還元することによって対象をすっかり取り逃がす羽目になっている」(ハーマン 2019, p.10)という批判もある。換言すると、ANT では人間の認識できないレベルの行為を行うモノの存在可能性を考えることができなくなっている。一方ぬいぐるみ愛好家たちは、ぬいぐるみを相手に会話を行い、時間経過によるぬいぐるみの劣化を愛された証として肯定的に捉える（宮脇 2022)。こうした事例を参照しながら、本研究は物質に刻印された時間の痕跡や死の兆候といった新たな軸をコミ

ュニケーション研究に導入していくことを目指す。

発表では、モノに刻まれた時間や死への兆候を描き出し得る題材としてぬいぐるみ病院の患者たちを取り上げる。ぬいぐるみ病院とは、「ぬいぐるみ法人もふもふ会」が運営するぬいぐるみ修理サービスである。ぬいぐるみ病院では修理に出されたぬいぐるみのことを「患者さま」と呼び、外科手術（破れた部分の縫合や綿の詰めかえ）やエステ（専用洗剤によるクリーニング）等のサービスを行っている、ぬいぐるみ愛好家たちの中では有名な存在である。上述したモノのコミュニケーションを考察するに辺り特に興味深いのが、ICU（集中治療室）で行われるという「皮膚移植手術」（ぼろぼろになった布部分の修理）である。治療の様子はぬいぐるみごとに様々であるが、共通していることは(1)愛するぬいぐるみとこれからもずっと一緒に暮らしたいという思い(2)気に入っているぬいぐるみの劣化を含めた外見や匂い、触り心地をそのまま維持したいという思い(3)しかし、実在している物としてのぬいぐるみの状態のままでは今後一緒に過ごすことが難しくなるという葛藤、が交錯しているという点である。ぬいぐるみ病院はそういった思いに対し「当院の皮膚移植手術、カバーリング法は新しい皮膚の中に以前の皮膚が残っていますので…その子の存在はそこにもちろんございます」と説明を行っている（「IUC 病棟」）。

ぬいぐるみの身体に染みや傷や匂いといった形で刻み込まれた持ち主との時間、そしてそれらが醸成する唯一性、これらは ANT に抜けていた個々のモノの独自性や深い次元を示すエビデンスとなる。さらに、ぬいぐるみは生命を持たぬゆえ死とは無縁であるかのように思われるが、映画トイ・ストーリーシリーズでおもちゃ達が恐れているように、「忘れられる」という形での死が常に付きまとう存在でもある。映画のようにぬいぐるみ同士でのコミュニケーションが行われているかどうかは知る余地がないが、少なくともぬいぐるみは日々持ち主とコミュニケーションを行っており、その痕跡を劣化（ぬいぐるみ病院では「愛され色」と呼んでいる）という形で自身の身体に留め続けている存在だと言えるのではないか。

引用文献

奥野克己（2021）「ぬいぐるみとの対話：アニミズム、身体の内と外から」『ユリイカ 2021 年 1 月号：特集ぬいぐるみの世界』青土社 158-166.

菅野遼(2019)「修辞学の人類学的機械：1964-1965 年万博博覧会とアンドロイド・リンカーン」『日本コミュニケーション研究第 47 巻第 2 号』87-112.

菊地浩平(2018)『人形メディア学講義』東京：茉莉花社

楠見友輔(2021)「ニューマテリアリズムによる教育研究の可能性:物と人間の関係に焦点を当てて」『教育方法学研究 46』

ザルテンアレクサンダー・北野圭介(2018)「1　新しい唯物論の可能性とその限界―兆候としてのモノ」北野圭介編『マテリアル・セオリーズ：新たなる唯物論にむけて』京都：人文書院

ぬいぐるみ病院「ICU 病棟」閲覧日：2023 年 1 月 31 日
https://nuigurumi-hospital.jp/icu.html#anchorPreservation

宮脇かおり(2022)「ぬいぐるみという記号からコミュニケーション主体を捉え直す」日本記号学会第 42 回大会　追手門学院大学総持寺キャンパス 2022.9.17.

ハーマン・グレアム(2019)『非唯物論：オブジェクトと社会理論』上野俊哉訳　東京：河出書房新社

ポスト・コンテンツツーリズムにおける場所・モノの資源化
–コンテンツの錯綜がひきおこす観光のコンフリクト–

齋藤　光之介（法政大学大学院政策創造研究科修士課程）

1. 「観光地」を舞台にするコンテンツ

人びとは観光地において、人間どうしのコミュニケーションだけでなく、モノや環境ともコミュニケーションを図っている(須藤 2022)。それは映画や小説、アニメといった「コンテンツ」が動機づける観光である「コンテンツツーリズム」も例にもれない。いわゆる「アニメ聖地巡礼」をその典型とするコンテンツツーリズムの現場では、コンテンツの舞台となった場所や、そこにある様々な観光資源(モノ)をつうじたコミュニケーションが生成されるのである。本発表では、そうしたコンテンツツーリズムをめぐる場所・モノによって媒介されるコミュニケーションを考察の俎上に載せる。

岡本健はアニメに動機づけられた観光の特徴として、熱心なファンにより舞台となった土地が「発見」される一連の過程を描出している。その後、「発見」された「聖地」の情報はブログなどで共有され、さらに多くのファンが訪れるようになっていくことで段階的に観光地となっていく(岡本 2018)。しかしながら、従来そのように語りえた以上のプロセスが近年では消滅しつつある。その要因としては、Google ストリートビューなどを用いた「聖地」の「発見」が短時間でおこなわれること、そしてそれが SNS 等のソーシャルメディアによって即座に拡散されるようになったことが考えられる。また、「コンテンツツーリズム」じたいが人口に膾炙するなかで、舞台となった土地を制作者側が明示しているコンテンツも散見される。

本研究では今日的なコンテンツツーリズムをめぐるこうした状況を、「ポスト・コンテンツツーリズム」と指呼したい。そこでは、地域が積極的にコンテンツの舞台であることを宣伝したり、制作者が地域を紹介したりといった事例が散見される。すなわち現在の状況を勘案すると、そこではコンテンツの著作権者、および舞台となった地域の先行的介入が一般化しつつあるのである。また、従来と比較してみた場合、はじめから観光資源の豊富な、いわゆる「観光地」が舞台として設定される傾向にある点を指摘することもできるだろう。ポスト・コンテンツツーリズムの時代において、コンテンツは観光を誘発する(してしまう)ことを前提に制作される。それゆえにコンテンツの舞台には、すでに観光者を受け入れるリソースをそなえた「観光地」が設定されているのだと推察できる。

この場合における「観光のリソース」として、土産物店などの観光者むけの消費の場や観光案内所、あるいは名所・旧跡などの一般的な観光資源をあげることができる。こうした観光地において、コンテンツのファンは自分がそこを訪れたことを様々なかたちで他者に提示しようとする。先述の SNS をつうじた写真等のシェア以外にも、鷲宮神社の事例を参照すると、ファンたちはキャラクターが描かれた絵馬というモノを奉納する場合がある。あるいは、訪問者が自由に書き込めるノート(以後「観光地ノート」)や、舞台となった施設の黒板がファンたちのメッセージ交換の媒体＝モノとなる場合もある（岡本 2018)。

2. 「観光地ノート」にみる観光地の文脈の変容

発表者は上述の「観光地ノート」に関して、静岡県浜松市の浜名湖佐久米駅において 2022 年 8 月に調査を実施した。浜名湖佐久米駅は、もともと線路やホームに群がるゆりかもめをかき分けるようにして列車が進む姿から、人気の観光スポットであったが、山梨県を中心とした地域を舞台としたアニメ『ゆるキャン△』に登場したことで「アニメ聖地」となった。駅舎のなかにある観光地ノートは、『ゆるキャン△』のファンが訪れるようになる以前から駅に設置してあったようであるが、ノートの記述をみてみると、浜名湖佐久米駅が登場する回の放送日を境として、そこに記入される内容の傾向が変容している。放送以前までは、ゆりかもめなどの水鳥に関する記述や写真、鉄道ファンのものと思われる書き込みが多く見受けられた。それが放送以後になると、『ゆるキャン△』の「聖地巡礼」として訪れたことや、列車がアニメとコラボした「ラッピング車両」、そして当該アニメのキャラクターたちのイラストが多く書き込まれるようになったのである。また、放送直後に書き込みの量が大幅に増加したことも顕著な傾向といえる。こうした記述の増加は、アニメの「聖地」となることで観光客が増え、コミュニケーションが活発化したことの証左といえよう。しかし他方で、それは既存の観光リソースがコンテンツツーリズムに流用された一例として位置づけることもできる。ともあれ以上のような事例は、ファンによる創発的な実践であり、また、「参加型文化」という概念から把捉することができるだろう。しかし、ポスト・コンテンツツーリズムにおいては、こうした観光実践も予定調和にとどまるのではないだろうか。というのも、前述のとおり、昨今ではリソースが豊富な地域が「聖地」として選定される傾向にあり、そこでファンたちは「巡礼」することを期待された存在でしかない。既存の観光リソースとして(意図されずにではあるが)用意された「観光地ノート」に書き込む行為を、手放しで創発的な実践であると評することは難しい。

以上の議論からポスト・コンテンツツーリズムでは、ファンと制作者の相互参照性が「聖地」を構築するダイナミズムに影響を与えていると考えうる。それは、水が高いところから低いところへと流れるように、観光資源の豊富な地域がコンテンツの舞台として選定されていく競争原理としても位置づけうる。

3. 結語

浜名湖佐久米駅では、『ゆるキャン△』とのコラボレーションのほかに、アイドルグループ「AKB48」とのコラボレーションをおこなっている。駅舎内では『ゆるキャン』と「AKB」のポスターが並べて掲示されており、また、発表者が訪れた際には「エヴァンゲリオン」のラッピング車両も走っていた。これらはコンテンツが既存の観光資源に頼るなかで、狭い地域が複数のコンテンツを受け入れるようになっていることを示している。著名な観光地では、こうしたコンテンツの「渋滞」に遭遇することも少なくはないだろう。

山村高淑は、コンテンツツーリズムを、「場所」をメディアとする「メディアミックス」であるとする。コンテンツは「場所」と結びつくことで、その物語世界を拡張していくのである(山村 2021)。前述の「渋滞」が発生している状況では、まったく別の文脈を持ったコンテンツが、ひとつの場所で交錯している。それぞれのコンテンツが、浜名湖佐久米駅という「場所」をメディアとしてみずからの物語世界を拡張しようとしており、そこではコンテンツの

観光リソースをめぐる競争が前景化している。それは、さながら人びとの注目を資源と考える経済圏を指す「関心の経済学（economics of attention）」を彷彿とさせる。これはソーシャルメディアを中心として拡大しつつある（金　2021）が、「場所」というメディアにおいても有効に作動しうるのではないだろうか。

以上のような議論から、観光資源の豊富な「場所」にコンテンツが集中することで、コンテンツツーリズムの創発的な側面が抑制されうる状況を明らかにする。そして、コンテンツの「聖地」となった観光地のモノ・場所が媒介するコミュニケーションが、循環的にコンテンツツーリズムを構築していく過程を示す。

引用文献

岡本健（2018）『アニメ聖地巡礼の観光社会学――コンテンツツーリズムのメディア・コミュニケーション分析』法律文化社

金暻和（2021）「ソーシャル・メディアと「関心の経済学」――メッセージの制作から流通の時代へ」小西卓三・松本健太郎編『メディアとメッセージ――社会のなかのコミュニケーション』

須藤廣・遠藤英樹・高岡文章・松本健太郎編（2022）『よくわかる観光コミュニケーション論』ミネルヴァ書房

山村高淑（2021）「コンテンツツーリズムで読み解く拡張現実化する社会――拡張し続ける物語世界とツーリズム実践について」岡本亮輔・山田義裕『いま私たちをつなぐもの――拡張現実時代の観光とメディア』弘文堂

恋活・婚活（自律的出会い）におけるツール選択に関する研究

友池　梨紗（愛知淑徳大学）

1. はじめに

国内の未婚率は 1980 年以降上昇しており、2020 年時点で男性の約３割、女性の約２割が 50 歳まで一度も結婚したことがないことがデータで示されている（国立社会保障・人口問題研究所、2022）。婚外子の割合がわずか 2.4%の日本（内閣府、2022）では、未婚化による少子高齢化の加速は不可避であることから、恋愛や結婚といった個人のライフイベントに対して社会的関心が高まっている。そんな中、本研究は未婚化の背景として挙げられる「交際相手との出会い」に焦点を当て、人びとが恋活・婚活を進める中で、どのようにして交際相手と出会おうとしているのか探っていく。

2. 「出会い」の変遷

1960 年代後半に恋愛結婚の割合が見合い結婚の割合を上回って以降、見合い結婚が占める割合は減少し続け、2020 年時点では日本の婚姻全体の約 1 割に留まっている（国立社会保障・人口問題研究所、2022）。しかし、だからといって近年の婚姻のほとんどを占める恋愛結婚の数そのものが増えているわけではない。1970 年代以降、見合い結婚の減少と共に恋愛結婚の発生率も低下傾向にあり、婚姻数そのものが減少している。

1970 年代以降、伝統的な見合い結婚に代わって日本の皆婚社会を支えていた恋愛結婚は、職場を通じた出会いによる職縁結婚であった（岩澤、2010）。当時の職場は一種の大お見合い会場と化しており、社員同士の結婚による恩恵を見込んだ企業が社員の結婚の世話を見ることは一般的であった。しかし、企業文化の変容とともに職縁結婚は縮小し、職場は配偶者選択に関する特別な場所ではなくなった（岩澤、2010）。結果、見合い結婚と職縁結婚の文化の衰退によって日本の婚姻数は減少するに至った。

見合い結婚や職縁結婚の裏側には、当事者たちの結婚の面倒を見てくれる世話好きな個人や企業が存在した。それらの存在がなくなった今、当事者自ら交際相手と出会うルートを見いださなければならない。しかし、自分に合う相手と出会い、交際相手になるまでに関係を構築するには相当のコストが不可欠となる。結果、未婚者で結婚意向のある者の半数近くが結婚していない理由として「適当な相手にめぐりあわないから」を挙げている。

3. 偶発的出会いと自律的出会い

筆者は、変化を続ける男女の出会いがその後の関係構築のコミュニケーションプロセスにどのような影響を及ぼすのか調査を行っており、恋愛交際に結びつく出会いは大きく２つに分けられると考えている（友池、2021）。学校や職場、趣味の場などで偶然知り合った相手と親密になり、交際関係に発展する「偶発的出会い」と、マッチングアプリに登録する、街コンや合コンに参加する、知人に異性を紹介してもらうなどして自ら出会いの場を作る「自律的出会い」である。これら２つの出会いを比較した際、例えば、偶発的出会いでは日々のコミュニケーションを通して互いの印象が形成されていたのに対し、自律的出会いを通して出会

った二人は自分が掲げる理想の相手像を元に互いを値踏みするようなコミュニケーションを図っていたことが明らかとなった。

昨今の出会いの変遷から今後は自律的出会いの受容が高まることが予想される。そして、２人の関係発展を促進してくれる世話好きの個人が欠如する現代では、恋愛交際を希望する一人ひとりが交際相手と出会い、関係を深め、交際関係を育む必要があり、そこに不可欠なコミュニケーションの観点から調査を進めることは喫緊の課題である。

4. 自律的出会いにおけるツール選択

筆者は、交際目的での出会いを「自律的出会い」とひと括りにしてきたが、具体的に見ていくと、スマホ１つで手軽に利用できるマッチングアプリ、信頼のおける友人からの紹介、手厚いサポートが受けられる結婚相談所、必ず複数の人と会って話ができる街コンなど、各ツールの特徴はさまざまである。そのため、どのツールが自分に合っているか分からず利用に至らないケースが考えられる。また、選択したツールが自分の性格や生活環境に合わず、恋活や婚活に嫌気が差して交際を諦めてしまう人がいることも予測される。そこで、実際にツールを活用して恋活・婚活を行った人びとに調査を行い、各ツールの特徴を割り出すことが求められる。具体的には、利用者の性格、価値観、置かれた環境などから合っているツールを示すことができれば、これから恋活・婚活を始めようとする個人や恋活・婚活サービスを提供している事業の一助となるだろう。

今回発表する内容は、ツール選択に関するアンケート調査の第二弾である。第一弾では、恋活・婚活ツールを利用したことがある人を対象に初めてツールを利用した年齢やきっかけ、実際に使ったことのあるツールに対する印象などを尋ねた。その結果、人びとは自分の年齢や置かれた環境に合ったツールを選択しており、ツールによって生じるコミュニケーションに関わるメリット・デメリットの違いも顕著となった。

本発表では、再度アンケートを実施して得られた結果から、各ツールに対する利用前後の人びとの印象の変化や自身の性格や生活環境を考慮した上でのツールとの相性などに関する知見を発表する。

引用文献

岩澤美帆 (2010).「職縁結婚の盛衰からみる良縁追求の隘路」佐藤博樹・永井暁子・美輪哲（編）『結婚の壁 非婚・晩婚の構造』勁草書房（pp.37-53）.

国立社会保障・人口問題研究所 (2022).「第 16 回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）」https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou16/doukou16_gaiyo.asp（2023 年 1 月 31 日最終閲覧）.

友池梨紗 (2021).「恋愛コミュニケーションプロセスに関する日本的研究−現代日本人男女はどのようにして交際相手と出会い、『付き合う関係』を構築するのか−」西南学院大学大学院博士論文.

内閣府 (2022).「男女共同参画白書 令和 4 年版」https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r04/zentai/index.html（2023 年 1 月 31 日最終閲覧）.

個人の認知・心理的特性の歪みが他者のコミュニケーションへの評価に与える影響とその関連性の解明
―完璧に見える人物が癪に障るのはなぜか―

小山　哲春（京都ノートルダム女子大学）
佐藤　桃華（京都ノートルダム女子大学）

1. 研究の目的と仮説

我々が日常的に行っている他者のコミュニケーションの評価は、話し手要因、聞き手要因、環境要因、等、様々な要因に依拠している。しばしば同一人物のコミュニケーションに対して多様な評価、解釈が生じることがあるが、こうした評価のズレの原因の一つとして、特に聞き手の心理、認知的要因が想定される。本研究では、完璧に見える人物（誰にでも平等で、理性的で、正しく見え、周囲から人気と評価を得ており、大半の人間がその人物に対して素直に尊敬の念を抱くような人物）に対して「なんか怪しい、胡散臭い」というネガティブな評価をする少数派に焦点を当て、このような、ある意味で「歪んだ見え方」に影響を及ぼす心理・認知的な個人特性を明らかにすることを目的とする。換言すれば、本研究は、私たちが普段どれほど自身の性格を把握し、どのようなフィルターを通して他者のコミュニケーションを評価しているかを考察するものである。

上述の「歪んだ」コミュニケーション評価（以下、「猜疑的評価」）の要因と考えられる個人特性とその具体的な影響について、本研究では以下のような議論（五つの仮説）を構築した。⑴ Self-Monitoring(以下 SM)：その場の状況や他者の反応を把握する能力であり（杉浦, 1998）、「完璧」を装っていると思われる言動に敏感になると考えられる。同時に自己呈示を統制する社会的スキルも持ち合わせている（ibid.）ことから、完璧に見える人物に対しても同様に意図的自己呈示（つまり、演技）を疑う、という猜疑的評価に繋がると予測される。⑵ 仮想的有能感：他者を軽視することで自身の有能性を維持する感覚（速水他, 2004）から、完璧に見える人物に対する歪んだ見方（他者軽視）で自身の有能感を満たそうとすることが考えられる。⑶ 私的自己意識：自身の内面（感情，動機，気分）に対して注意を向けやすいこと（神田, 2019）から、自身の心にフォーカスするため、完璧に見える人物に対し何か癪に障る部分を直感的に感知できると予想される。⑷ 自己本位性：自身の感情に優先的に焦点を置くこと（三浦・吉田, 2011）が結果的に他者軽視に繋がると考えられる。⑸ 認知必要性：自身や他者に対して積極的に分析を行い、意識的にも無意識的にも深く考えてしまう傾向（Cacioppo & Petty，1982）があると、表面的な評価に留まらず見えない部分について過度に探求を試みることから猜疑的評価に繋がると予測される。

2. 研究方法

上述の仮説を検証するため、大学生 72 名（男性 20 名、女性 51 名、その他 1 名、平均年齢 21.12（*SD*=2.00））とその他 11 名（男性 6 名、女性 4 名、その他 1 名、平均年齢

29.45(*SD*＝13.06)）の計 83 名（平均年齢 24.06 (*SD*=10.01)）を対象に、シナリオによる擬似実験デザイン研究を行った。

まず、SM 尺度(岩淵, 1982)、他者軽視尺度（速水他, 2004）、攻撃性尺度（安立, 2001）、Need for cognition (Cacioppo and Petty, 1982)、自己愛尺度（三浦・吉田, 2011）、自己意識尺度（押見他, 1986）、そして本研究で新たに作成した他者の反応への関心尺度を用いて個人変数の計測を行った。次に、2 種類のシナリオ（①人物 A：誰から見ても高い評価を得られるようなコミュニケーションスタイルの人物、②人物 B：一見「完璧な人」ではあるが、そのコミュニケーション・スタイルに何らかの意図性や演技性を感じさせる可能性のある人物）を準備し、それぞれに対するコミュニケーション評価を測定した。評価項目には個人変数で用いた構成概念を再利用し、人物 A には疑いを持たず肯定的に評価し、人物 B を猜疑的に否定的評価した回答者を本研究の分析対象とした。なお、全ての質問項目にリッカート尺度（5 件法）を用いた。

3. 結果と考察

本来の研究対象は、人物 A,B への評価に差がある参加者における他者評価と個人要因との相関を目的としていたが、当初の統計分析（相関分析）では有意な結果を得られず、変数生成の妥当性や独立変数の操作の機能不全も疑われた。そこで、人物 A,B の評価差を基準に 2 つのグループを構成し、*t* 検定を用いて個人要因の平均値の比較を行った。分析対象とした評価項目は、「人物 A/B は印象操作を行っており、それがバレていないと思っているか」と「あなたは、人物 A/B さんをどこか胡散臭いと思うか」に限定した。グループは、高低群(人物 B への猜疑的評価高、人物 A への猜疑的評価低）と低低群(人物 A,B への猜疑的評価共に低)に分類した。

印象操作に対する評価に関しては、仮想的有能感（$t_{(32)} = 2.00$, $p = .02$）、 猜疑心（$t_{(32)} = 1.99$, $p = .02$）、他者の反応への関心（$t_{(32)} = 2.41$, $p = .01$)に有意差が見られ、いずれも高低群のほうが高かった（表 1 参照)。胡散臭さに対する評価については、他者志向性（$t_{(45)} = 2.07$, $p = .02$）、仮想的有能感（$t_{(45)} = 3.28$, $p = .001$）、猜疑心（$t_{(45)} = 2.19$, $p = .01$）、自己本位性（$t_{(45)} = 1.83$, $p = .03$）、他者の反応への関心（$t_{(45)} = 2.42$, $p = .01$)に有意差が見られ、いずれも高低群のほうが高かった（表 2 参照)。どちらの評価においても、猜疑心、仮想的有能感、他者の反応への関心は、高低群との有意な差が確認された。この結果から、完璧に見える人物に対する少数派の猜疑的評価は、認知必要性や Self-Monitoring(演技性)などの社会認知的スキルや能力に基づいた「正しい見方」ではなく、むしろネガティブな心理特性の影響を受けた「歪んだ見え方」である可能性が示唆された。(2137 字)

引用文献

安立奈歩. (2001).「攻撃性の諸相に関する研究」,『京都大学大学院教育学研究紀要, 47』, 475-487.

岩淵千明・田中国夫・中里浩明. (1982).「セルフ・モニタリング尺度に関する研究」,『The Japanese Journal of Psychology, 54』 (1), 54−57.

押見輝男・渡辺浪二・石川直弘. (1986).「自己意識尺度の検討」, 『立教大学心理学科研究

年報, 28』, 1-15.
神田信彦. (2019).「私的自己意識特性と公的自己意識特性に関する一考察―対人的自己嫌悪感との関係から―」, 『生活科学研究, 41』, 1-8.
杉浦健. (1998).「セルフモニタリング傾向の意味の再検討−対人不安, 自己評価との関係から−」,『近畿大学教育論, 9』(2), 37-51.
速水敏彦・木野和代・高木邦子. (2004).「仮想的有能感の構成概念妥当性の検討」, 『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 51』, 1-8.
三浦絵美・吉田富二雄. (2011).「新たな自己愛傾向尺度の作成と妥当性の検討一過去の経験との関連を通して一」,『Tsukuba Psychological Research, 41』, 25-32.
Cacioppo, J. T., Petty, R. E., Feinstein, J. A., & Jarvis, W. B. G. (1996). Dispositional differences in cognitive motivation: The life and times of individuals varying in need for cognition. *Psychological Bulletin, 119*, 197-253.

補足資料

表 1. 印象操作の評価における高低群と低低群の個人要因の平均の比較

	高低群(人物 B への猜疑的評価高、人物 A への猜疑的評価低) (n = 14)		低低群（人物 A,B への猜疑的評価共に低）(n = 20)			
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*	*p*
Self-Monitoring(演技性)	3.26	1.15	3.01	1.18	.60	.27
Self-Monitoring(他者志向性)	3.52	.94	3.16	1.00	1.05	.15
仮想的有能感	3.30	.83	2.73	.78	2.00	.02*
猜疑心	3.26	.89	2.67	.81	1.99	.02*
私的自己意識性	3.67	1.08	3.52	.71	.49	.31
認知必要性	2.60	1.16	2.82	.84	-.63	.26
自己本位性	2.11	1.34	1.90	.76	.60	.27
他者の反応への関心	3.47	.75	2.80	.83	2.41	.01*

*p < .05, **p < .01

表 2. 胡散臭さの評価における高低群と低低群の個人要因の平均の比較

	高低群(人物 B への猜疑的評価高、人物 A への猜疑的評価低) (n = 17)		低低群（人物 A,B への猜疑的評価共に低） (n =30)			
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*	*p*
Self-Monitoring(演技性)	2.96	1.27	3.04	1.03	-.24	.40
Self-Monitoring(他者志向性)	3.78	.95	3.20	.91	2.07	.02*
仮想的有能感	3.45	.91	2.67	.70	3.28	.001**
猜疑心	3.33	.92	2.77	.79	2.19	.01*
私的自己意識性	3.61	1.17	3.86	.74	-.89	.18
認知必要性	3.00	1.21	3.25	.96	-.77	.22
自己本位性	2.64	1.38	2.06	.79	1.83	.03*
他者の反応への関心	3.43	.80	2.86	.75	2.42	.01*

*p < .05, **p < .01

Beyond the Family and Normativity
—A Queer Reading of *Spy x Family*—

Naoki Kambe (Rikkyo University)

1. Introduction

Tatsuya Endo's *Spy x Family* is one of the most successful media productions (e.g., anime, manga) in the last few years. It is about the Forgers, a fake family formed by Loid Forger, Yor Forger, and Anya Forger. Each character has "a secret self they don't show to other people" (Endo i); Loid is a spy called "Twilight"; Yor is an assassin known as Thorn Princess; Anya, a six-year-old girl, is a telepath. As part of Loid's spy mission requiring him to find a wife and a child, the three meet and form a fake family. For this reason, the Forgers could be seen as a queer family "where something about the structure / nature / being / doing of the family is inherently queer" (Manning 69). This family in turn reflects as well as challenges the image of a normative family or the nuclear family ideal. In this paper, I attempt to perform a queer reading of *Spy x Family* regarding this normativity or ideal.

2. Queer Theory and Normativity

In gender and sexuality studies, "'queer' is not simply a synonym for lesbian, gay, and bisexual" but it is also used to challenge the idea of the normal (Richardson and Wearing 49). Queer theory, then, critiques, destabilizes, subverts, and challenges normativity or "the system through which norms, normalization and the normative are naturalised and made to seem ideal" (McCann and Monaghan 13). What makes *Spy x Family* interesting is that the Forgers not only reflect the normative ideal in order to achieve Loid's mission but also challenge this very ideal given the nature of queer family. It is my contention that through this doubleness or dilemma the Forgers challenge normativity and show a new mode of doing intimacy in queer family. In particular, I focus on the following three interrelated normativities: nuclear family ideal, fatherhood & motherhood, and heteronormative & genetic intimacy.

3. Nuclear Family Ideal, Fatherhood & Motherhood, and Heteronormative & Genetic Intimacy

First, *Spy x Family* reflects and challenges the nuclear family ideal which "denote[s] families composed of a mother and a father romantically involved with each other, and their genetically related children that they have conceived *naturally*" (Cutas and Chan 1). In contrast to this ideal, the Forgers form a fake family without a romance between Loid and Yor and their genetically related children. However, they build their intimacy in their unique ways and, as a result, reveal the privilege of the nuclear family ideal (Cutas and Chan 2).

Second, Loid and Yor reflect and challenge the ideal fatherhood and motherhood. Each of them does not think that he or she is a good father or mother for Anya. This is because each one's ideal is based on normativity or the ideology of fatherhood or masculinity including being *daikokubashira* or family breadwinner for Loid and that of motherhood including "devotion to children, parental affection, and self-sacrifice" for Yor (Ohinata 205). Although they seem to satisfy the ideal, the way in which they perform the ideal fatherhood or motherhood is unusual given their secrets of being a spy and an assassin.

Finally, the Forgers reflect and challenge normative intimacy based on romantic/sexual/genetic relations. Indeed, romance or sex is related to one of the ideals of the nuclear family through which a husband and a wife are to be assumed as "'sexually affiliated' to each other" (Cutas and Chan 1-3). Loid and Yor's relationship departs from this romantic or sexual nature. The bond or intimacy of the Forgers including Anya is not based on genetics either. Rather it is based on the commonality shared by the three as "social outliers from traumatic backgrounds who have been displaced from any chance at a 'normal' upbringing in a 'normal' family" (Henderson par. 23). In this way, the Forgers show a new mode of doing intimacy in/for queer family which is against the normativity of a nuclear family.

Work Cited

Cutas, Daniela and Sarah Chan. "Introduction: Perspectives on Private and Family Life." *Families beyond the Nuclear Ideal,* edited by Daniela Cutas And Sarah Chan., pp. 1-12. Bloomsbury, 2012.

Endo, Tatsuya. *Spy x Family 1.* Translated by Casey Loe. VIZ, 2019.

Henderson, Alex. "Queer Resonance and Critiquing Heteronormativity in SPY x FAMILY." *Anime x Feminist* 15 June 2022. https://www.animefeminist.com/queer-resonance-and-critiquing-heteronormativity-in-spy-x-family/ accessed 25 January 2023.

Manning, Jimmie. "Queering Family Communication." *Navigating Relationships in the Modern Family Communication, Identity, and Difference,* edited by Jordan Soliz and Warner Colaner Feldman, pp. 69-85. Peter Lang, 2020.

McCann, Hannah and Whitney Monaghan. *Queer Theory Now*. Red Globe Press, 2019.

Ohinata, Masami. "The Mystique of Motherhood" Translated by Timothy John Phelan. *Japanese Women,* edited by Kumiko Fujimura-Fanselow and Atsuko Ameda, pp. 199-213. The Feminist Press, 1995.

Richardson, Niall and Sadie Wearing. *Gender in the Media.* Palgrave, 2014.

ファンタジーテーマ分析によるナイキ CM の
リプライにおける「日本人性」

杉原　奈南実（立教大学大学院）

1.　研究背景・目的・意義

現代日本社会では民族や国籍の多様化が進み、海外にルーツを持つ人が多く暮らしている。しかし依然として民族や国籍に関わる差別問題は深刻で、多様性を尊重する社会とは言い難い。民族や国籍に関わる差別問題の解決のために現在までマイノリティと呼ばれる人たちの声を聞く研究が多くある一方で、多様化する日本社会でのマジョリティとしての「日本人性」の意味を問い直す研究は多くない。またマジョリティ研究にはホワイトネス研究という、黒人などの有色人種に焦点が当てられてきた人種研究において、「白人性」を問い白人中心の社会を問い直すという研究がある（松尾, 2005, p. 16）。そこで本研究では、ホワイトネス研究を参考にマジョリティとしての「日本人性」がどのように構築されているかを明らかにする。

2.　研究対象・方法

研究対象は、2020 年 11 月 28 日から 12 月 4 日までの Twitter で公開されたナイキ CM「動かしつづける。自分を。未来を。The Future Isn't Waiting.」の投稿に対するリプライ 188 件である。Bormann によって作られた、集団内に共有されている世界観を理解するのに役立つ分析方法であるファンタジーテーマ分析（Foss, 2018, p. 105）を用いて、ナイキ CM へのリプライの「日本人」や日本、それに対比する集団や国、地域（例えば「韓国人」、韓国など）に注目し、人々がどのような世界観を構築しているのかを明らかにすることを試みる。ファンタジーテーマ分析により明らかになるのは集団の中の世界観であり、その世界観を明らかにすることで、「日本人性」も明らかになると考えられる。分析の具体的な手順としては、Foss の「Fantasy-Theme Criticism（2018）」の研究方法を参考に Settings、Characters、Actions の三要素に分けて分析する。Foss（2018, p. 113）によると、頻出する「メジャーテーマ（major themes）」は分析の主題となるため、本研究でも少なくとも 2 回以上出てくるものを扱うこととした。また「日本人性」の意味について研究するため今回は Characters を重要な要素とし、頻出する Characters を「メジャーキャラクター（major characters）」として分析を行った（同上）。

3.　分析結果

コーディングの結果、ナイキのツイートに対するリプライ欄には二つのレトリカルコミュニティがあることがわかった。それは日本社会の差別に対し問題意識がある集団（グループ１）と、ない集団（グループ 2）である。ただし CM に対して肯定か否定かさえ判断できないものや、CM について説明を求める等のリプライはファンタジーテーマおよびレトリカルコミュニティが形成されているとは考えにくいため分析に含めない。グループ 1 は 55 件、グループ 2 は 123 件、分析対象に含めないその他は 10 件であった。

グループ 1 は「日本社会の差別は問題である」がレトリカルヴィジョンであり、グループ 2 のレトリカルヴィジョンは「日本社会の差別は問題ではない」である。グループ 1 のリプライはナイキや CM に対して肯定的で、「メジャーキャラクター」は、ナイキ、「日本人」（マジョリティ含む）、マイノリティ（在日コリアン含む）、生きにくさを感じている人（CM 内の子供含む）、ナイキ批判者、レイシズムである。グループ 2 ではナイキは批判されている。グループ 2 の「メジャーキャラクター」は、ナイキ、「日本人」、「日本人」ではないとされる人たち（在日コリアン、朝鮮学校元校長含む）である。

4. 考察

まずナショナリズムや「日本人性」の特徴と関連することとして、グループ 1 もグループ 2 も「日本人」そのものに対して疑問を抱いているようなリプライはなかった。これは松尾（2010，p. 194）の「無徴化」や「不可視」という「日本人性」の第三の特徴によるものではないだろうか。またグループ 2 では「日本人じゃない子」という表現も出てきていることから、「他者」と異なる存在として「日本人」が構築されていることは吉野（1997，pp. 10-11）のナショナリズムの定義や松尾（2010，p. 193）の「日本人性」の第一の特徴である「他者」との差異によって構築されると関連している。更に「日本人じゃない子」という表現からは松尾の第二の特徴である「日本人」が自己他者社会を捉える基準になっていることがわかる（同上）。

グループ 1 は、日本社会の差別を問題だと認識はしているが、自分以外（特にリプライ欄のナイキ批判者）が差別をしているという認識があり、自らの差別の加害可能性を見落としている可能性がある。なぜなら、ナイキ批判者が差別から目を背けているというものや「反・反差別者」という言葉から、差別がナイキ批判者とマイノリティの間で起きていると認識している可能性があるからである。

グループ 2 ではナイキが「日本人」を攻撃しているという認識に対する危機感がグループ 2 の「日本人」の構築を強化していると考えられる。グループ 2 にとってナイキは「日本人」を差別する、悪者にする存在である。つまり、「日本人」という「ネーション」の危機感がナイキの CM によって触発されている。これは、アイデンティティを脅かす危機感が船曳（2010，p. 27）の「対外的危機によって触発された日本意識」や、吉野（1997，p. 11）が「ネーションの文化的アイデンティティ」が不安や脅威にさらされると、その強化を通して共同体を再生しようとするという主張に当てはまると考えられる。また、グループ 2 では「私たち（We）」という主語がしばしば使われ、ナイキ批判者が多数だろうという認識に基づくと推測できるリプライが多かった。一方で、グループ 1 の投稿者は個人としての意見や経験を述べており、集団の連帯感はグループ 2 の方が強かった。グループ 1 は「日本人」としての連帯感はグループ 2 より弱く、それはグループ 1 には「差別する日本人」と「差別しない日本人」というキャラクターが存在していることによるとも考えられる。

5. 結論

本研究ではナイキ CM のリプライ欄に日本の差別に対し問題意識があるグループ 1 と問題意識がないグループ 2 というレトリカルコミュニティが形成されていることが分かった。日

本の差別に問題意識がないグループ 2 は差別解消のためには問題であるが、グループ 1 も差別に対し問題意識はあっても当事者意識がないということも問題である。なぜなら、グループ 1 にとって差別が、「差別する日本人」とマイノリティの間で起きていると認識しているとすると、差別問題が他人事になってしまうからである。差別問題が他人事であると、一時的に差別について考えるようになったとしても、差別解消のための継続的な行動には繋がり難いだろう。日本の民族や国籍に関わる差別問題は、社会的構造によるものであるから差別解消のためにはマジョリティとしての「日本人」の積極的な活動が必要である。

引用文献

Foss, S. K. (2018). Fantasy-Theme Criticism. *Rhetorical criticism : exploration and practice* (5th ed.)(pp. 105-115). Long Grove, IL: Waveland press.

船曳健夫（2010［2003］）.『「日本人論」再考』. 講談社.

松尾知明（2005）.「特定課題研究『ホワイトネス研究』と『日本人性』―異文化間教育研究への新しい視座」『異文化間教育』第 22 号，15-26 頁.

松尾知明（2010）.「第 8 章問い直される日本人性――白人性研究を手がかりに」（渡戸一郎・井沢泰樹・編著）『多民族化社会・日本』191-209 頁．明石書店.

吉野耕作（1997）.『文化ナショナリズムの社会学：現代日本アイデンティティの行方』名古屋大学出版会.

第 52 回年次大会実行委員会 Annual Convention Committee

大会実行委員長 Program Chair

師岡 淳也 （立教大学） Junya Morooka (Rikkyo University)

大会実行委員 Program Committee Members

菅家 知洋 （東海大学） Tomohiro Kanke (Tokai University)
小西 卓三 （昭和女子大学） Takuzo Konishi (Showa Women's University)
田島 慎朗 （関西大学) Noriaki Tajima (Kansai University)
松本 健太郎 （二松學舍大学） Kentaro Matsumoto (Nishogakusha University)

実行委員（JCA） JCA Committee Members

①大会プログラム・学術局関連 Convention Program

責任者 小西 卓三 （昭和女子大学） Takuzo Konishi (Showa Women's University)
日高 勝之 （立命館大学） Katsuyuki Hidaka (Ritsumeikan University)
師岡 淳也 （立教大学） Junya Morooka (Rikkyo University)
菅野 遼 （昭和女子大学） Ryo Kanno (Showa Women's University)

②大会プログラム・発表査読者 Review Committee

小西 卓三 （昭和女子大学） Takuzo Konishi (Showa Women's University)
日高 勝之 （立命館大学） Katsuyuki Hidaka (Ritsumeikan University)

③受付・事務局関連 Registration

責任者 松島 綾（立命館大学） Aya Matsushima (Ritsumeikan University)
宮脇 かおり （桃山学院大学） Kaori Miyawaki (St. Andrew's University)
脇 忠幸 （関西学院大学） Tadayuki Waki (Kwansei Gakuin University)

④大会広報関連 Advertisement

責任者 松本 健太郎 （二松學舍大学） Kentaro Matsumoto (Nishogakusha University)
今井 達也 （南山大学） Tatsuya Imai (Nanzan University)
宮崎 新 （名城大学） Arata Miyazaki (Meijo University)
友池 梨紗 （愛知淑徳大学） Risa Tomoike (Aichi Shukutoku University)

コミュニケーション学会　会長及び本部（学会事務局）President and Office of JCA

会 長　President　守﨑 誠一（関西大学）　Seiichi Morisaki (Kansai University)

学会事務局
〒162-0801
東京都新宿区山吹町 358-5
アカデミーセンター
日本コミュニケーション学会事務局
Phone: 03-6824-9372　FAX：03-5227-8631

JCA Office：
358-5 Yamabuki-cho, Shinjuku-ku, Tokyo,
The Office of Japan Communication Association
162-0801
E-mail: jcom-post@bunken.co.jp

入退会、住所等変更、会費納入、及び学会誌バックナンバーと記念図書購入申込に関する問合せ先：
For inquiries regarding membership, dues, and publications:

国際文献社
アカデミーセンター
日本コミュニケーション学会事務局
〒162-0801 東京都新宿区山吹町 358-5
Phone: 03-6824-9372　FAX：03-3368-2827

International Academic Publishing Co., Ltd.
Academy Center
The Office of Japan Communication Association
358-5 Yamabuki-cho Shinjuku-ku Tokyo,
162-0801
E-mail: jcom-desk@bunken.co.jp